

学内広報

for communication across the UT



特集：■学生企画コンテスト

本郷キャンパス食環境改善プロジェクトの軌跡

■新役員の紹介

2010.3.19

No. 1397

学生企画コンテスト 本郷キャンパス食環境改善プロジェクトの軌跡

学生である私たちが運営した「本郷キャンパス食環境改善プロジェクト」は2008年の秋に第2回学生企画コンテストで優秀賞を受賞し、2009年から本格的な活動を開始しました。活動開始当初は「学生と大学が協力して、大学を改革していく」という仕組みはできつつあったものの、まだ手探りの状態でした。しかし活動を進めていくうちに、大学の方々や生協の方との強い連携体制が築かれ、当時は困難だと考えられていた企画も実現させることが出来ました。この特集では、食環境改善プロジェクトの1年間の活動を振り返ることで、大学が学生と連携することの重要性と、その可能性をお伝えしたいと思います。

(本郷キャンパス食環境改善プロジェクト代表 大久保智夫 経済学部4年)

学生企画コンテストとは？

学生企画コンテストは、2007年に東大創立130周年を記念して始められた事業です。

この事業は東京大学憲章の精神に基づき、学生が大学の運営にも積極的に参加し、学生のアイデアを活力あふれるキャンパスづくりに生かすことを目的として創設されました。2007年には3件、2008年には2件のプロジェクトが優秀賞を受賞し、大学からの援助を受けながら「キャンパスの活性化」、「知の社会への還元」などをテーマに活動しています。

学生と大学、生協の連携

学生企画コンテストの大きな特色は、「学生と大学が協力しながら大学を変えていく」ことにあります。どんなことをしたいのか、そしてどのように活動するのは学生に任されますが、学生のみでの活動では活動範囲も限られてしまいます。そこに大学に関する知識や経験が豊富で、様々な学内リソースの活用方法を教えてくださる学生支援グループと、さらに私たちの場合には食堂を運営している生協の方々が一つのチームとなって食環境の改善に取り組みました。学生と大学、生協がミーティングを頻繁に行い、意見や方向性を共有しながら担当範囲やスケジュールを決めてプロジェクトを進めていきました。



1年間の活動成果

14000人のメニューコンテスト

「学食は学生の声で変えることができる」ということをアピールするための象徴的イベントとして、「14000人のメニューコンテスト」を開催しました。学生から東大オリジナルメニューを公募し、1位に輝いたものを学食でメニュー化するという企画です。

5～6月の募集期間で集まった応募は175通。予選ではプロジェクトチームと生協とでこれを5つのメニューにまで絞り込みました。最終審査は11月に試食会形式で行い、50人超の学生に実際にそれぞれのメニューを試食してもらってから、投票で決めました。当初は優勝作品のみメニュー化する予定でしたが、企画も好評だったため、最終審査に残った5つの作品全てが12～1月の期間限定で提供されました。応募・審査の両過程で多くの学生の参加を得ただけでなく、コンテストが終わった後も「入賞作品を食べる」という形で多くの学生がコンテストに「参加」したのです。それぞれのメニューは学生からも好評で、短期間で合計1万食以上の売り上げがあったため、4月から再度提供されることが決まりました。

14000人のメニューコンテストの試食会に参加しました！

どのメニューも大変独創的で、見た目も美しく、もちろん食べてみてもとても美味しかったです。このような学生が参加できるイベントはとても素晴らしいものだと思います。これからは是非このようなイベントを継続してやっていただければいいなと思います。

(文学部・4年) Coop News より



試食会の様子。
50名を超える学生が集まりました。



最優秀賞を受賞した「脱いか東丼」。いか東（＝いかにも東大生らしいというネガティブな言葉）から卒業するための、力の出るメニュー。

第二食堂改修への協力

生協では2009年の夏季休業期間を活用して第二食堂の改修を行いました。この改修は厨房内の改修のみならず事務所の移転に伴う通路の拡大、レジの増加やサラダバーの増設までを含む、大規模なものでした。本プロジェクトとしても、現在の食堂への学生の不満として大きかった「設備の老朽化」を改善するため、学生の声を代表して改修の実現をお願いし、床の全面改装や案内の英語表記として実現されました。さらに魅力的な食堂にするために、建築デザイナーの方に協力を得て具体的な改修・改善の指針をまとめ、要望として提出しました。

第2食堂改修の記事を読みました。

早速行ってみました。以前より開放的な印象を受け、非常に好印象でした！（理学系研究科・M2）

Coop News より



改修された第二食堂。英語表記が増え、明るい雰囲気になりました。

留学生向けメニューの拡充

現在、東京大学には2000名以上の留学生が在籍しており、今後も留学生増加に向けて大学側の努力が進んでいます。しかし、彼らの生活をサポートする体制は十分とはいえません。「せっかく留学先として東大を選んでくれて、その後各国で活躍する留学生であるからこそ、東大で充実した学生生活を送り、いい思い出を作ってもらいたい。」そうした思いから留学生に対する食事の面からの支援を提案しました。

具体的には、宗教上の制約から食べられるメニュー数が限られていたイスラム系の学生のために、彼らの宗教事情を考慮した「ハラールメニュー」の提供数を大幅に増やしていただくよう、留学生とともに生協の食品開発担当の方と協議させていただいたり、試食会や調理過程の見学会などを開催したりしました。その結果、留学生が食べられるようになったメニューは13品から40品に増え、それに伴って留学生の利用者も急増したということです。メニュー開発にあたって、大学生協東京事業連合のメニュー開発を担当されている方にもご協力いただいたので、今後他大学においてもハラールメニューが広がるきっかけとしての役割も果たすことになりました。

ハラールメニュー例

(イスラムの食文化に配慮したメニュー)

- ビーフカレー
- タンドリーチキン
- 鶏肉のトマト煮
- イカフライ
- マスの塩焼き
- 野菜コロッケ
- ポテトフライ



留学生との意見交換会の様子。
現在の食環境への不満や改善方法を聞き、生協としてどう対応できるかを議論しました。

いままで、食べられるメニューが限定されていて困っていたが、今回生協と学生プロジェクトのおかげで大幅に食べられるメニューが増えて、非常に嬉しい。非常に困難なお願いにも関わらず、実現していただいたことに敬意と感謝を表明します。(イスラム文化研究会の学生)

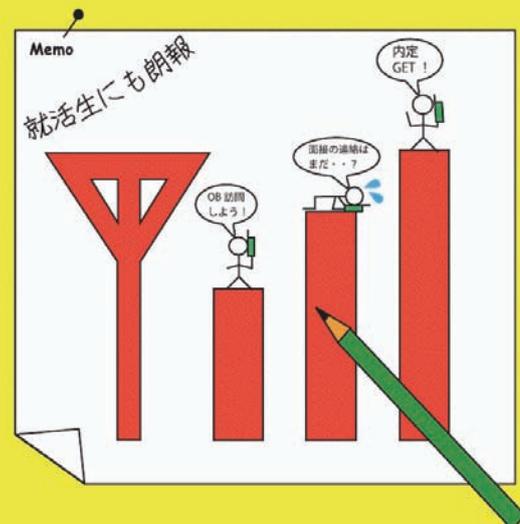
食堂への電波の導入

以前から、地下にある中央食堂と銀杏メトロ食堂には携帯電話の電波が入らず、学生や教職員の利用者から待ち合わせに不便といった声が挙がっていました。特に就職活動を行う学生にとっては、企業からの連絡がとれなくなることは重大な問題であり、食堂を利用できない原因にもなっていました。本プロジェクトでは大学の施設・資産系の方に要望を提出し、各携帯電話会社との交渉をお願いしました。調査期間を経て、2009年末から各社の工事が始まり、食堂での携帯電話利用が可能となりました。電波が入ったことだけでなく、学生の実現することをポスターや東京大学新聞で告知し、学生に利便性の向上と、問題を解決するために行動する重要性を訴えました。

インターネット上で情報を自由に共有できるサイト(Twitter)でも学生から「中央食堂・メトロ食堂で携帯の電波が届くようになりました」とのつぶやきがみられました。

学生の声で

中央・銀杏メトロ食堂に、電波が入るようになりました!



新着のみなまへお知らせ

以前から「就職活動の時に平癒だ」「待ち合わせできない」などの声を学生の皆様から頂いておりましたが、今回は「1000人のメニューコンテスト」なども実施しました「長期キャンパス設備整備プロジェクト」の学生の協力も得て、中央食堂・銀杏メトロ食堂に携帯電話の電波が入るようになりました。
今後とも、学生の意見を反映した食環境を整えていこうと思っております。ご意見をお待ちしております。

さらなる改善に向けて

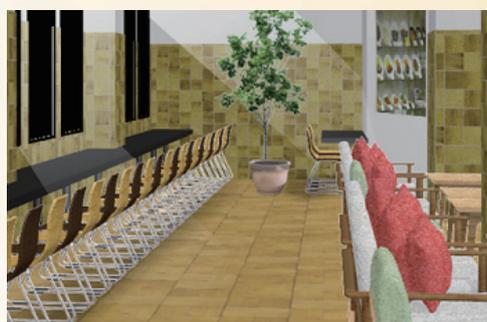
食堂を「多様な学生が集まり、くつろげる空間」へ

2009年の改修工事を経て、第二食堂は光が差し込み、床も改装されて学生からの評判は高まりました。一方で、大学内の貴重な厚生施設である食堂に対して、学生からの改善要望が残っていることも現状です。特に、老朽化したイスや机、画一的な席配置、緑の少なさなどに対して学生の不満があります。こうした不満や改善の必要性は、大学の学生生活委員会でも提起され、問題として認識されています。

大学の食堂は、ただ食事をする場所としてでなく、学生や教職員が所属を越えてくつろげる場所としての役割も持っています。東京大学には文系・理系にわたって多様な学部・学科・研究科が存在し、多様な教員・学生が集まることは大きな魅力ですが、くつろげる場所は学部ごとのラウンジなどに限られてしまっています。食堂の環境が改善され、居心地が良くなることによって、本郷キャンパスに欠けていたくつろげる交流スペースとしての役割も果たすことが期待できます。

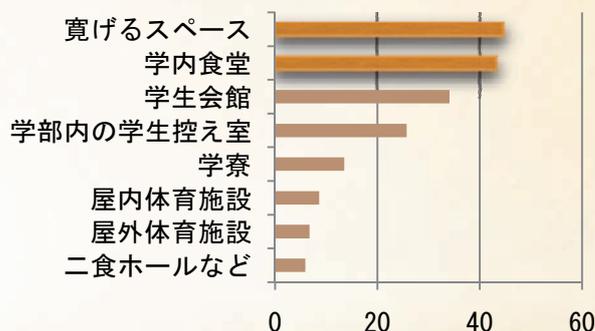
食環境の改善と学内交流スペース作りのため、具体的には、

- 一人席やボックス席など多様な利用に対応した席の導入、席配置の工夫
- くつろげるためのソファ席、観葉植物などの設置
- 営業時間終了後も、毎日決まった時間までの開放
- 第二食堂を開放していることの広報の強化などの改革を提案しました。



(改善イメージ)

2003年に行われた学生生活実態調査の結果です。「諸施設等の中で、施設・設備の充実・整備が早急に必要と思うもの」に対しては、最も多かった要望は「寛げるスペース」(44.6%)に次いで「学内食堂」(43.2%)でした。



大学の環境改善のための、学生と大学の協力体制の充実を

この特集でお伝えした1年間の成果は、「学生の熱意と行動」、「大学によるプロジェクト運営のための支援」、「生協による学生の意見の反映」のどれを欠いても実現しなかったと思います。

従来のように、学生はアンケートを通じて意志を表明するだけ、大学がその要望の実現に努力する、という関係ではなかなか物事は進みません。学生が意志を行動に変え、関係する組織と協力していくこと、さらに大学や学内の組織がそうした意志と行動を反映するために活動することで、初めていままで難しいとされてきたことが実現するのだと、このプロジェクトを通じて実感しました。

学生支援グループをはじめ皆様の熱意により、平成22年にも学生企画コンテストが開催されることになりました。(http://www.u-tokyo.ac.jp/stu01/PDF/H21_kikakuyoukou.pdf)

こうした、学生の意志を反映する企画が存続することは重要で、私たちとしても非常に嬉しく思います。大学がこうして学生の意見を実現する仕組みを整えてくださっている、この機会を生かして、たくさんの学生が大学の改善に挑戦することを願っています。

(文・本郷キャンパス食環境改善プロジェクト代表 大久保智夫 経済学部4年)

本件に関する連絡先：本部学生支援グループ学生生活チーム 内線22524 担当：渡辺

このたび、就任された副学長、副理事の略歴、および、就任に当たっての挨拶を以下のとおり、掲載します。



副学長

内藤 廣

昭和49年3月 早稲田大学理工学部卒業

昭和51年3月 早稲田大学大学院理工学研究科
修士課程修了

昭和56年6月 内藤廣建築設計事務所所長

平成13年4月 東京大学大学院工学系研究科助教授

平成14年12月 本学大学院工学系研究科教授

平成22年2月 副学長（兼）工学系研究科教授

担当：キャンパス計画

専門分野：建築設計、景観設計

研究内容：主な実績に、メデジン市ベレン公園図書館（コロンビア共和国）、主な著書に『世界のSSD100』、『構造デザイン講義』、『建築のちから』などがある。

キャンパスの再構築を目指して

昨年七月よりキャンパス計画室長を務めてきましたが、この二月よりキャンパス計画担当の副学長の役割を果たすよう総長より命ぜられました。重責に身の引き締まる思いです。

わたしのミッションは、キャンパスをいかにして本学にふさわしいものに仕立て直すかだと思っています。ご存知のように、国立大学法人化以降、たくさんの建物が極めて早いスピードで建てられました。この勢いはしばらく続くこととなります。現行のキャンパス計画のルールは、良識と信頼を前提に組み上げられた紳士協定的な色彩が濃いものです。この間、急激に建てられた建物の幾つかは、残念ながら現行ルールの精神に合ったものにはなっていません。冷静に見れば、現行ルールはタガが外れて役に立たなくなりつつあります。ルールを改正し、分かりやすく実効性のある強いものに変える必要があります。再構築に向けて筋道の通ったものになりたいと思っています。

予算のダウンサイジング、環境問題、地域自治体との関係など、さまざまな問題が山積しています。また、学の国際化が叫ばれています。皆さんが活動しているキャンパスは、本当に国際的に胸を張れるような場所になっているでしょうか。問題はそれぞれ相矛盾しているように見えます。未来を見据えた大きな戦略が必要です。こういう時こそ、本学の英知を最大限活用すべきだと思っています。

漱石は三四郎に「学問の府はこうなくてはならない。こう云う構えがあればこそ研究もできる。えらいものだ」と語らせています。建物や環境は時代を越えて残っていきます。百年後に、この時代に何をしたのか、その精神が問われるのです。次の世代に誇りを持って受け渡せるキャンパスを構築しようではありませんか。微力ながら最善を尽くしたいと思っています。よろしくご協力のほど、お願いいたします。



副理事

宮川 光雄

昭和43年 3月 埼玉県立大宮工業高等学校 卒業

昭和43年 7月 東京大学 採用

平成9年 4月 本学経理部主計課課長補佐（予算担当）

平成12年 4月 東京医科歯科大学経理部契約室長

平成14年 4月 本学工学部・工学系研究科等経理課長

平成17年 4月 本学医学部・医学系研究科事務長

平成19年 4月 本学柏地区事務部長

平成22年 1月 副理事（兼）柏地区事務部長

担当：柏地区

副理事就任にあたって

このたび、1月1日付で副理事（柏地区担当）となりました宮川です。柏地区事務部長を引き続き兼務することとなっております。私は東京大学での勤務がまもなく40年となります。その間に、東京大学第3の極となる「柏キャンパス」の用地取得に関わる事務に、幸いにも携わりました。

現在の柏地区は3つのキャンパスから構成されております。平成7・10年度取得の「柏キャンパス」、その後取得の「柏Ⅱキャンパス」および「柏の葉駅前キャンパス」で、所在の教育研究部局等は、新年度から、1研究科、3研究所、2研究センター、1研究機構の7組織となります。また、そのほか各種施設の柏支所等および事務部があり、今後も新たな研究教育部局等の一部移転、設置計画が進められております。構成員数は年々増加し、現在では教職員および大学院学生、研究生を合わせると2,500名以上となっております。そのため、柏キャンパスでは「柏キャンパス共同学術経営委員会」等を組織し、キャンパスに共通する事項や各部局等からの委託事項を、各部局等の長、各室の長および事務職員が審議、全体の合意により実行する仕組みが成り立っております。

このたび副理事に就任いたしまして、微力ながら、柏地区のキャンパス発展に少しでもお役に立てるよう、今までの経験を活かして取り組んで参りたいと存じます。今後とも皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

NEWS

一般ニュース

本部評価・分析グループ

平成 22 年度 学科・専攻の設置等について

一般

大学院薬学系研究科薬科学専攻（博士前期課程）の設置

平成 22 年 4 月 1 日から設置される、薬学系研究科薬科学専攻（博士前期課程）の設置目的・概要等は次のとおりである。

1. 設置の趣旨・必要性

平成 18 年度の六年制教育課程の導入という我が国の薬学教育制度の大きな変更によって、東京大学薬学部は、従来の制度を引き継ぐ四年制「薬科学科」と薬剤師養成に特化した六年制「薬学科」の 2 学科を設置した。この学年進行に伴う措置として、既存の博士前期課程（分子薬学専攻、機能薬学専攻、生命薬学専攻、統合薬学専攻）を廃止し、平成 22 年度から、四年制の薬科学科を基礎とし、従来の上記 4 専攻をベースとした「薬科学専攻」（博士前期課程）を設置する。

なお、平成 24 年度には、「薬科学専攻」（博士後期課程）及び六年制の薬学科を基礎とする「薬学専攻」（四年制の博士課程）の設置を予定している。

2. 教育課程の編成の考え方・特色

平成 20 年度に設置した「統合薬学専攻」は、ヒトの病態・疾病を理解してそれらを克服するための基礎科学的な諸分野をインテグレート（統合・集積）・体系化し、医薬品の創成に向けた薬学的研究の展開を行う人材を早期に養成するという設置目的を忠実に実行し、一定の成果を収めつつある。さらに、21 世紀 COE などにおける経験と成果から、従来の枠組みを超えた教育・研究の組織化が進んでいる。このような

背景を基に、既存の統合薬学専攻の設置目的を本「薬科学専攻」全体に波及させ、薬学をカバーする全ての分野において最高水準の教育・研究活動を行い、横断的・統合的な能力を有する優れた創薬科学研究者、高度医療や医療行政に貢献する人材を養成する。

また、本「薬科学専攻」の博士前期課程においては、従来の「統合薬学専攻」における教育課程編成の考え方を中心に、有機化学、物理化学、生物化学を機軸に、ヒトの健康を維持・増進し、医薬の創製からその適正使用に向けた生命に関わる物質及びその生体との相互作用を対象とする統合的な方法論の教育を実践する。このために、基礎薬科学特論シリーズ（I～IV）に加えて、分野横断型の「ケミカルバイオロジー特論」、「クリニカルサイエンス特論」、「医療薬学特論」、「社会薬学特論」などのユニークな授業科目を開設し、産学連携研究室等の研究科内関連施設や、総長室総括委員会の下に置かれている生物機能制御化合物ライブラリー機構と連携し、創薬に向けた実践的な教育・研究も引き続き実践する。

3. 学位

修士（薬科学）

4. 入学定員

修士：100 名

医学部健康科学・看護学科の名称変更について

1. 名称変更の内容

平成 22 年 4 月 1 日より、医学部健康科学・看護学科を、医学部健康総合科学科に名称変更する。

2. 新名称の対象年次

1～4 年次

3. 名称変更の理由

健康科学・看護学科では、健康に関する様々なアプローチを学び、次世代の健康科学を担う優れた研究者、職業人の育成を図ることを目的に、幅広い教育研究活動を行ってきた。

特に近年では、健康に関する社会的な要請はますます高まりをみせてきており、単なる健康維持や増進のための技術的な対応ではなく、人間の健康を、成長発達、疾病の原因の探索と予防・治療、さらに健康という事象の本質までを含めて幅広く科学的に解明し、探究することが求められている。すなわち人々の健康について「人間を対象とした生命科学・生物学的研究」、「人間の生物学的側面を重視しつつ社会のしくみを考える研究」および「健康の保持と回復を支援する方法の開発・研究」などの多様な側面からの展開が、これからの大きなテーマであり、今後、これら多様な要請等に対し、柔軟かつ主体的に行動できる、新しいタイプの「健康科学」人材が一層求められている。

そこで、本学科が従来より進めている基礎生命科学、社会行動健康科学、看護科学などの「健康科学」分野の本質的な探求とともに、これらの知識・技術等を複

合的に身に付けさせるという教育方針をより明確に提示しつつ、将来の健康科学分野を志向する優秀な人材を積極的に受け入れ、高度な教育を資す東京大学によりふさわしい健康科学の教育組織として、「健康科学・看護学科」を「健康総合科学科」に名称変更し、個別の健康科学の集合体ではなく、健康に焦点をあてた総合科学としての『ヘルスサイエンス』教育の一層の推進を目指そうとするものである。

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)
チュニスー東京 ジョイントワーク
ショップ開催される
一般

1月5日(火)～7日(木)、「地球観測データ統融合によるアフリカの持続可能な開発支援」をテーマに、本学地球観測データ統融合連携研究機構の主要メンバーである教授陣とチュニジアの教育機関の研究者が、チュニス郊外にあり、歴史的にも有名なカルタゴのすぐ北に位置するシディ・ブ・サイド (Sidi Bou Said) という風光明媚な町に集まり、3日間に渡るワークショップを開催した。

両国の研究者が、チュニジア国内の水利用の実態について科学的な研究発表を行い、意見交換をしたうえで、今後の共同研究計画の企画立案を行った。

当機構からは、機構長の小池俊雄教授(工学系研究科)、溝口勝教授(情報学環)、喜連川優教授(生産技術研究所)、柴崎亮介教授(空間情報科学研究センター)と、西村拓准教授(農学生命科学研究科)、および、溝口研究室から伊藤哲氏、小池研究室から上田隆氏が参加した。

チュニジア側でこのワークショップの主催、運営実行にあたったのは、我が国のJICA-ODAの支援により現地に設立された、科学技術エコパーク (Borj Cdria Ecopark) の Salah Hannachi 教授(前・駐日チュニジア大使)と Faten Horriche 教授ら、チュニス国立工科大学 (Tunis National School of Engineering: ENIT) の Zoubeida Bargaoui 教授らであった。

ワークショップの構成は、初日に、以下の三つのテーマ別に、チュニジア側、日本側のそれぞれの研究者が交互に発表を行う形で研究発表を行った。

- Session 1: 気候変動と水問題
- Session 2: 農業と水問題
- Session 3: 地球観測とデータ統合

テーマならびに発表者は、このワークショップの開催に先立ち、東京とチュニス側で度重なる国際電話会議を経て、決定された。2日目の6日(水)には、前日の研究発表に基づき、チュニジアー本学による共同研究テーマならびにその実施計画を協議した。

続く、7日には、科学技術エコパークから車で15キ

ロほど移動したところにある Beni Khalled Region と呼ばれる郊外の柑橘系果樹園を訪れ、そこを現地観測のフィールド地点と決め、溝口勝教授のグループらが、フィールドサーバーの設置、および土壌水分・植生水分などの予備観測を行った。

また、7日の午後には、チュニス市の Tunis City of Science の講堂にて、『「気候変動と水循環変動」-- そのメカニズム、予測、影響評価、適応--』と題して、小池俊雄機構長による一般講演会も行われた。チュニス各地から多くの学生や研究者が、日本の最先端の研究発表を聴くために集まり、会場では、熱心な質疑応答による対話も行われ、盛況のうちに閉会した。以上、3日間に渡るチュニスー東京ジョイントワークショップの成果は、平成22年度、「データ統合・解析システム」の農業-水循環-気候の連携研究分野の応用機能研究課題のひとつとして、とりまとめられる予定である。



チュニスー東京ジョイントワークショップ出席者

お問い合わせは、下記までお願いいたします。
地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA) 事務局
メール: editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp
電話番号: 03 - 5841 - 6132
<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)
平成21年度「データ統合・解析システム (DIAS)」最終報告会開催
一般

1月14日(木)13時30分より、農学部弥生講堂・一条ホールにおいて、平成21年度「データ統合・解析システム (DIAS)」最終報告会が、地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA) の主催により開催された。

「データ統合・解析システム (DIAS)」は、「地球規模観測や各地域における観測で得られるデータ、また、数値気象・気候予測モデル等の出力データを収集し、それらを永続的に蓄積・統合・解析し、さらには社会経済情報などの融合により、世界の環境問題や自然災害など

の脅威に対する危機管理に有益な情報へと変換して、国内外に提供することにより、わが国の総合的な安全保障や国民の安全・安心の実現に資すること」を目的として、平成18年10月に、文部科学省研究開発局から受託研究予算を得て、5年間のプロジェクトとして開始された。平成21年度はDIAS研究開発4年目にあたっており、これまでの研究成果が、徐々に具体的な形となって現れてきており、最終年度を前にして、社会的にも非常に高い評価を受けている。現在開発中のDIAS情報共有・データ俯瞰システムについても、間もなく公開される運びとなっている。



森本大臣官房審議官による開会挨拶

会議の冒頭では、文部科学省の森本浩一大臣官房審議官（研究開発局担当）から、「気候変動に適應した新たな社会の創出に向けて、緩和策と適應策にあわせて取り組むことが重要である」、「文部科学省が策定した『文部科学省低炭素社会づくり行動計画』のグリーンイノベーションの適應戦略においてDIASは、今後、重要な共通のプラットフォームの役割を担うことが求められている」、「地球観測サミットにおいてもGEOSS（全球地球観測システム）の柱となる成果としてDIASの取組を我が国から発信していきたい」との開会のご挨拶をいただいた。

その後、「システム開発」・「データ投入」に関する5つの研究課題、「地球観測データの科学的・社会的に有用な情報への変換」に関する水・気候・農業・生態系などの10の利用研究課題について、それぞれ平成21年度の研究報告・評価が行われた。総合討論ではDIAS研究開発推進委員の先生方からの総評の後、小池俊雄機構長より「最終年度の平成22年度には10の利用研究課題の取り纏めをすること」と「同時に気候変動適用に関する新しい枠組みとして発展的・戦略的に引き続きチャレンジしていく」という方針が示された。



最終報告会 会場の様子

会議の終盤には、独立行政法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）の平朝彦理事から、「地球システムについて観測から利用までの一体的な研究をすることに当初は懐疑的であったが、着実に進展しており新しい枠組みに受け継がれるということは大変な成果があがっている」、「今後、広く一般に利用・実用化していくことで社会に貢献するときに更なる興奮が生まれるだろう」との閉会のご挨拶をいただいた。



JAMSTEC 平理事による閉会挨拶

なお、本最終報告会の状況は、地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）、ならびに、データ統合・解析システム（DIAS）のHPに掲載されている。

地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）

<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

データ統合・解析システム（DIAS）

<http://www.diasjp.org/>

海洋アライアンス

第8回イブニングセミナー開催

一般

1月29日（金）、本郷キャンパス工学部3号館において、第8回イブニングセミナー「海洋の大規模利用に対する環境影響評価～多様なステークホルダーが共通の基準で考えるために～」が開催された。今回は新領域創成科学研究科から佐藤徹教授を講師としてお招きし、Triple I (Inclusive Impact Index) と呼ばれる「包括的環境影響評価指標」についてご講演いただいた。

Triple Iとは大規模海洋開発の際にどのくらい環境に影響を与えるかを、経済性やリスクなど様々な立場から検討する試みである。これにより海洋開発は陸域を中心とした現行技術の代替案として有効か、また地球環境への負荷は持続的資源可能領域の範囲に収まるのかを、公平かつ定量的に評価することが可能となる。



Triple Iについて解説する佐藤教授

佐藤教授は環境と開発を二元論的に捉えるのではなく、開発に伴う環境変化を新たな環境創成として考え、包括的環境影響評価に基づいた環境調和型の技術開発を目指す必要があると述べた。同時にこれにより海洋利用技術の格差付けや国際競争力アップを狙うことができると期待を表した。現在は Triple I を使った様々な事例を作り、ディスカッションなどを通じて指標のさらなるブラッシュアップを図っているとのことである。

当日は各部局から多くの教員や学生が参加し、熱心に耳を傾けた。参加者からは「この指標をもっと精密化させたら、開発に関する議論に客観性を持たせることができるだろう」「この指標を有効に扱うには、縦割り行政の一元化が重要」といった声が寄せられた。

海洋アライアンスは海の問題をリラックスした雰囲気でも語り合うため、年間6回を目途に、イブニングセミナーを企画しています。詳細は海洋アライアンスホームページにてお知らせします。皆様のご参加をお待ちしています。



講演に興味津々の参加者

海洋アライアンスホームページ：

<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>

産学連携本部

第1回 八大学産学官連携関係本部長会議開催される

一般

2月3日（水）14時より、第1回八大学産学官連携関係本部長会議が、産学連携本部2階大会議室で開催された。

本会議は、今回、初めて行われるものであり、昨年11月に文部科学省の産学官連携関連予算が事業仕分けで廃止と判断される等、産学官連携を取り巻く厳しい情勢を踏まえ、主要国立大学の産学官連携関係本部間の情報交換を密にするとともに、有益なノウハウの相互活用等を狙いとして、影山和郎本学産学連携本部長から各大学に働きかけて実現したものである。

最初に文部科学省研究振興局の柳 孝研究環境・産業連携課長より「産学官連携の現状と今後の展望」をテーマに講演があった。産学官連携政策の経緯や、近年の進展状況のほか、昨年行われた行政刷新会議「事業仕分け」での「廃止」の評価と、事業見直しについてふれた後、産学官連携の新たなフェーズに向けた今後の展開として、「オープンイノベーション過渡期に応じた対応」「大学等への個別的支援終了後の姿に向けた対応」「産学連携への国民理解の醸成」等をあげ、まとめとされた。

次に経済産業省産業技術環境局の谷 明人大学連携推進課長より「経済産業省における産業技術政策について」をテーマに講演があった。平成22年度産業技術関連予算の説明、産学官連携を促進するための施策、各地の先端イノベーション拠点の整備など実例をあげて説明された。国や独立行政法人からの補助金が減っているなかで、大学は今まで通り研究を続けることは困難になってきている。「ものづくり職人」を育成するためにお金を出す民間企業も出てきている例のように、仕組みを変えたり、さらに工夫したりすることが求められているのではない

かと締めくくられた。

その後、北海道大学、東北大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、東京大学の各本部長より、各大学における産学官連携の現状と課題が発表された。運営費交付金が年々減少していることから、外部資金（共同研究や受託研究、寄付講座等）を増やすことは産学官連携の使命でもあるといえる。知財の保有コスト負担感が増大するなど、知財戦略の再検討が必要になってきているという認識も共有した。

また、外国からの留学生・滞在研究者、国際共同研究や国際学会への参加機会の急増による、大学の持つ技術・機器の「安全保障輸出管理」体制を整備する必要性も議論された。名古屋大学では「安全保障貿易に係わる輸出管理ハンドブック」を発行し、すべての教職員に配布し説明会も実施して、各部局に輸出管理責任者を置かずに、産学官連携推進本部または国際交流協力推進部がそれぞれ一括して一次審査をする体制にした旨の報告があり、外為法の一部改正で米国では実刑になった大学研究者の例も指摘され、国際化が進む中でこれらの問題については早急に対応していかなければいけないと締めくくられた。

本会議は、当面、年2回程度開催することとなり、次回は京都大学産学官連携本部を幹事校として、9月頃に行う予定である。



第1回八大学産学官連携関係本部長会議の様子



文部科学省、経済産業省、八大学産学官連携本部長を含む関係者が一同にそろった

- 北海道大学：岡田尚武産学連携推進本部長（理事・副学長）
- 東北大学：飯島敏夫産学連携推進本部長（理事）
- 東京工業大学：伊澤達夫産学連携推進本部長（理事・副学長）
- 名古屋大学：宮田隆司産学官連携推進本部長（理事・副総長）
- 京都大学：牧野圭祐産学官連携本部長（副理事）
- 大阪大学：谷口研二産学連携推進部副本部長
- 九州大学：安浦寛人知的財産本部長（理事・副学長）
- 東京大学：影山和郎産学連携本部長

一般

総括プロジェクト機構

航空イノベーション総括寄付講座 (CAIR) ベルギー大学説明会を開催

研究教育の国際化は本学の行動目標となっている。航空イノベーション総括寄付講座は、ベルギー大使館との連携により、2月12日（金）、工学部11号館 T-Lounge においてベルギー・ワロン地区の大学に関する説明会を開催した。当日は、ベルギー王国ワロン地域政府貿易・外国投資振興庁 - AWEX - 日本代表のクレール・ギスレン氏とベルギー観光局ワロン・ブリュッセル日本局長のダミアン・ドム氏より、欧州の大学での学生生活の様子などが説明され、ベルギーチョコレートのプレゼントもあり東大生との交流が実現した。ベルギー大使館は2月25日（木）まで、赤門横の UT Café においてベルギー家庭料理のメニュー提供にも協力し、ベルギー文化の紹介も行った。



工学部11号館 T-Lounge に掲示されたベルギー紹介ポスター



説明会の様子

総括プロジェクト機構、公共政策大学院



航空イノベーション総括寄付講座 (CAIR) 「航空と地球温暖化に関するセミナー」及び国際交通政策研究ユニット (ITPU) 「第5回 ITPU 国際セミナー 国際航空運送と気候変動」開催報告

航空交通は、今後も引き続き成長することが見込まれており、航空セクターから排出される温室効果ガスの影響は看過できないものとなりつつある。こうした中で今後の排出削減目標と技術的実現可能性について議論するため、航空イノベーション総括寄付講座 (CAIR) は、航空イノベーション研究会との共催により、2月18日 (木)、工学部2号館213号室にて「航空と地球温暖化に関するセミナー」を開催した。さらに翌日の19日 (金) には、公共政策大学院国際交通政策研究ユニット (ITPU) が、政策ビジョン研究センター (PARI)、CAIR、海洋アライアンスとの共催により、山上会館大会議室にて「第5回 ITPU 国際セミナー (第55回公共政策セミナー) 国際航空運送と気候変動～ COP15の結果と今後の展望」を開催した。

1日目の「航空と地球温暖化に関するセミナー」は、積雪にもかかわらず200名近い参加者が集まる中、鈴木真二教授 (工学系研究科、CAIR代表) の司会により開始され、開会の辞として、松本洋一郎理事 (副学長) より、将来世代に取り返しのつかない大きな負の遺産を作り出さないために早急な対策が求められている旨の挨拶があった。講演では、岡野まさ子特任准教授 (CAIR) より、本セミナーの議論の軸となる航空セクターにおける温室効果ガス排出の現状と国際的な議論の概要が説明された後、英国ケンブリッジ大学気候変動緩和研究センター (4CMR) 上席研究員 Annela Anger-Kraavi 博士より、COP15での議論並びにEU排出量取引の概要と航空部門が含まれることによる経済的影響についての試算が紹介され、ドイツ連邦環境庁上席研究員の Frank Wetzel 氏からは、EUにおける航空環境技術関連政策及び最近の研究動向が紹介された。昭和シェル石油 (株) 執行役員である伊藤智明氏からは、2050年までのエネルギーシナリオについて、持続可能なシナリオとそうでないシナリオが示された上で、食物供給に影響を与えな

い次世代バイオ燃料の開発状況などが説明された。

後半は、宇宙航空研究機構 (JAXA) 主任研究員の岡井敬一氏より、JAXAにおける水素エンジンや電動モーターなど脱化石エンジン研究開発の取り組みについて紹介があった後、(株) IHI 航空宇宙事業本部民間エンジン事業部技術部長である今村満勇氏より、航空機エンジン開発における環境性能向上へのメーカー側の取り組みが説明された。また、三菱航空機(株)プロジェクトマネージャー補佐の佐倉潔氏からは、2014年に就航予定であるMRJ (三菱リージョナルジェット) の優れた環境性能を中心に、機体メーカーとしての環境負荷軽減の取り組みについて紹介された。(株)日本航空国際航空運航部航路グループ副課長の船井康伸氏からは、昨年10月に行われたアスパイヤーフライトの結果を紹介しつつ、よりリアルタイムに近い気象情報等を活用し、航空企業側と管制機関側とが協力することにより、究極のCO₂削減フライトが可能となることが説明された。

パネル・ディスカッションでは、上記講演者に加え、国際民間航空機関 (ICAO) の田中鉄也氏、津江光洋教授 (工学系研究科)、李家賢一教授 (工学系研究科) を交え、鈴木真二教授の進行により、昨年12月に開催されたCOP15の結果やEUの排出量取引等、航空セクターにおける我が国や欧州の取り組みを踏まえつつ、「今後の排出削減目標は技術的に達成可能なのか」について議論が行われた。最後に、鈴木真二教授から、目標達成は「技術的に実現可能であっても特に燃料については経済的に課題が多く、技術のみならず排出量取引のような政策的な枠組みが必要になり、総括寄付講座も学内の知の結集と海外も含む学外との連携によりその実現に向け日本のプレゼンスを高めたい」との閉会の辞があり、1日目のセミナーは閉会となった。

2日目の2月19日は、国会開会中のうえ、年度末の時期にもかかわらず、行政・企業サイドの現役幹部を含む約100人が会場を埋める中、日原勝也特任教授 (公共政策大学院) の司会により開始された。開会の辞として、金本良嗣教授 (公共政策大学院長) から、主催するITPUの紹介があり、理論・科学と実務を融合し公共政策について先導的な研究を行うことの重要性が指摘され、活発な議論への期待が述べられた。

講演では、最初に、ICAOの田中氏から、国際航空と地球環境の問題に関し、昨年合意された航空セクターのグローバル目標 (2050年までに全世界の実運航上の燃料効率性を毎年2%改善) など最近の全般的な状況について説明がなされた。中国・中欧国際工商学院のYimin Zhang教授からは、「中国にとって気候変動は環境問題であると同時に開発の問題であり、CBDR (共通だが差異ある責任の原則) を強く支持する」との指摘がなされた。ドイツのWetzel氏からは、「排出総量にキャップをかける方式は、効率性指標による方式より、効果が包括的で優れており、前者を優先する」との見方などが紹介された。英国のAnger-Kraavi博士からは、排出量取引の理論、EU-ETS導入の影響についての試算と今後の

EU-ETSの基礎となるキャップの見通しなどについて説明がなされた。

後半は、講演者4人に加え、全日本空輸(株) (ANA)の佐々木徹部長、ITPUの城山英明教授と日原特任教授が加わり、金本院長がモデレーターとなって、パネル・ディスカッションが行われた。この問題に関する合意形成のための論点として、目標、手段、途上国への支援、原則、交渉のフレームワークの5点が示され、最初の3点は同時に合意することが必要である可能性があること、そのため、CBDRと無差別原則(Chicago条約)の対立を克服することが重要であり、関係者の対立を調和するプラクティカルな解法を探ることが不可欠であることが議論された。

また、削減の限界費用を世界中で一定とすることが望ましいこと、ICAOの削減目標はそれに近づく工夫がなされていること、EU-ETSは効率的な削減の可能性がある一方で、地域的な枠組みであり、グローバルな枠組みが必要との見方があることなどについて熱心に意見交換がなされた。閉会に際し、森田朗教授(PARI・センター長)から、参加者への謝辞と、研究成果を社会に発信して政策形成に寄与することの重要性が述べられた。



開会の挨拶をする松本理事(副学長)と会場の様子(2月18日)



開会の挨拶をする金本院長と会場の様子(2月19日)

読者投稿写真 No.12



冬から春へ

2月18日の朝と午後に、柏キャンパスに建設中の海洋研究所を撮影したものです。朝は雪が積もっていましたが、昼過ぎには暖かい日差しが降り注ぎ、すっかり雪が溶けてしまいました。冬の終わりと春の訪れを感じました。

(撮影：大学院総合文化研究科・教養学部
学術研究員 三津間康幸さん)

特集の記事を執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

① テーマの選定

全学の教職員を読者対象とするテーマを選定。まずは、本部広報グループに気軽にご相談ください。

② 内容・構成の決定

執筆部署と学内広報編集スタッフ(以下、編集スタッフ)の打ち合わせでページ内容を決定します。

③ 原稿の執筆

決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。

④ ビジュアル要素の提供

写真・図・イラストを提供していただきます。

⑤ デザイン

執筆部署または編集スタッフがページデザインを作ります。

⑥ 校正

文字校正を行なっていただきます。

⑦ 完成

刷り上がった学内広報は執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

期日を申しますので、ご協力をお願いします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム

TEL : 03-3811-3393 内線22031

E-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

本部入試グループ

平成 22 年度外国学校卒業学生特別選考の第 1 次選考合格者が決まる

一般

平成 22 年度外国学校卒業学生特別選考の願書受付は、第 1 種が 12 月 1 日(火)～12 月 8 日(火)、第 2 種が 11 月 2 日(月)～11 月 10 日(火)に行われた。

志願者数は、第 1 種(私費外国人留学生) 115 人、第 2 種(帰国生) 109 人、合計 224 人で前年度より 11 人減った。

また、第 1 次選考書類審査が行われ、1 月 22 日(金)に第 1 種 37 人、第 2 種 62 人、合計 99 人が合格し、各人あてに結果が通知された。第 2 次選考の小論文と学力試験は 2 月 25 日(木)・26 日(金)、面接試験は、3 月 17 日(水)に行われ、合格者発表は 3 月 23 日(火)に行われた。

科 類	第 1 種 (私費外国人留学生)		第 2 種 (帰国生)	
	志望者数	合格者数	志望者数	合格者数
文科一類	6	3	26	16
文科二類	37	11	27	12
文科三類	15	5	19	13
理科一類	37	11	15	8
理科二類	15	5	16	10
理科三類	5	2	6	3
合 計	115	37	109	62

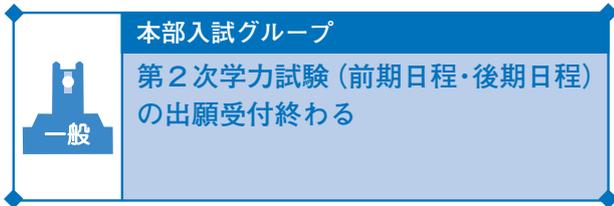
なお、志願者の種別人数、国籍等(第 1 種)及び修学先の所在国名等(第 2 種)の内訳は、次のとおりである。

【第 1 種】

インドネシア	1 人
韓 国	28 人
シンガポール	1 人
台 湾	2 人
中 国	75 人
中国(香港)	1 人
ベトナム	1 人
マレーシア	1 人
モンゴル	1 人
コロンビア	1 人
ブラジル	2 人
英国(香港)	1 人
合 計	115 人

【第 2 種】

インド	1 人
インドネシア	2 人
韓 国	4 人
タ イ	1 人
台 湾	1 人
中 国	21 人
中国(香港)	3 人
フィリピン	2 人
オーストラリア	2 人
ニュージーランド	3 人
コロンビア	1 人
ドミニカ共和国	1 人
ブラジル	1 人
アメリカ	40 人
カナダ	1 人
イギリス	5 人
オーストリア	1 人
オランダ	1 人
スイス	1 人
スウェーデン	1 人
ドイツ	4 人
フランス	10 人
ベルギー	1 人
ロシア	1 人
合 計	109 人



平成 22 年度第 2 次学力試験の願書受付が 1 月 25 日（月）から 2 月 3 日（水）までの間行われた。
 志願者数は次のとおりである。

前期日程入学志願者数等

科 類	募集人員	志願者数	倍 率	前年度 の倍率
文科一類	401	1,265	3.15	4.10
文科二類	353	1,142	3.24	3.41
文科三類	469	1,529	3.26	3.20
理科一類	1,108	3,037	2.74	2.61
理科二類	532	1,963	3.69	3.94
理科三類	100	503	5.03	5.52
合 計	2,963	9,439	3.19	3.34

後期日程入学志願者数等

科 類	募集人員	志願者数	倍 率	前年度 の倍率
文科一類	100	3,137	31.37	31.66
文科二類				
文科三類				
理科一類				
理科二類				
理科三類				
合 計	100	3,137	31.37	31.66

本部入試グループ

平成 22 年度第 2 次学力試験（前期日程）第 1 段階選抜合格者が決まる

一般

本学の平成 22 年度第 2 次学力試験（前期日程）の第 1 段階選抜が行われ、2 月 10 日（水）午後、本郷地区キャンパス内において合格者が発表された。

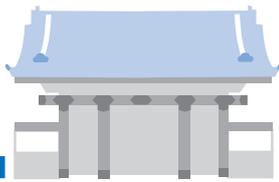
これにより、2 月 25 日（木）・26 日（金）に、本郷・駒場の両キャンパス試験場において行われる前期日程試験の受験者数が確定した。各科類の第 1 段階選抜合格者数は下表のとおりである。

前期日程試験第 1 段階選抜結果

科 類	募集人員	志願者数	倍 率	第 1 段階選抜		合格者科類別成績		
				合格者	予告倍率	最高点	最低点	平均点
文科一類	401	1,265	3.15	1,203	3.0	880	613	753.29
文科二類	353	1,142	3.24	1,064	3.0	870	696	760.98
文科三類	469	1,529	3.26	1,410	3.0	869	717	766.67
理科一類	1,108	3,037	2.74	2,778	2.5	876	705	774.31
理科二類	532	1,963	3.69	1,864	3.5	889	649	749.63
理科三類	100	503	5.03	400	4.0	881	676	790.27
合 計	2,963	9,439	3.19	8,719				

※大学入試センター試験成績は、900 点を満点とする。

部局 ニュース



退職教員の紹介

部局

大学院法学政治学研究科・法学部

小早川 光郎 教授

(本学在職期間：昭和44年7月～平成22年3月)



昭和44年6月
本学法学部卒業
昭和44年7月
本学法学部助手
昭和47年11月
本学法学部助教授
昭和58年5月
本学法学部教授
平成3年4月
本学大学院法学政治学研究科
教授

平成10年7月～平成12年3月 本学評議員

所属：行政法

専門分野：行政作用法一般理論、行政訴訟制度論など

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『行政訴訟の構造分析』(東京大学出版会、1983年)

『行政法上』(弘文堂、1999年)

『行政法講義 下 I II III』(弘文堂、2002年～2007年)

渡辺 浩 教授

(本学在職期間：1969年7月～2010年3月)

1969年6月 本学法学部卒業

1969年7月 本学法学部助手

1973年3月 本学法学部助教授

1983年12月 本学法学部教授

1991年4月 本学大学院法学政治学研究科教授

2000年4月～2002年3月

本学大学院法学政治学研究科長・法学部長

2003年8月～2005年3月

本学副学長(2004年4月より理事(副学長))

所属：アジア政治思想史

専門分野：日本を中心とした、東アジアの17世紀から19世紀の政治思想史

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『近世日本社会と宋学』(東京大学出版会、1985年。新装増補版2010年)

『東アジアの王権と思想』(東京大学出版会、1997年)

『日本政治思想史 17-19世紀』(東京大学出版会、2010年)

奥脇 直也 教授

(本学在職期間：平成12年4月～平成22年3月)

昭和44年6月 本学法学部卒業

昭和46年3月

本学大学院法学政治学研究科公法専攻修士課程修了

昭和51年4月

本学大学院法学政治学研究科公法専攻博士課程修了

昭和51年8月 東京工業大学工学部助教授

昭和60年12月 東京工業大学工学部教授

昭和63年4月 立教大学教授

平成12年4月 本学大学院法学政治学研究科教授

所属：国際組織法

専門分野：国際法、国際組織法、海洋法など

研究内容(代表的な著書や論文等)：

共編著 『現代国際法の指標』(1993)

共編著 『国際法キーワード』(1997)

論文「国際法における合法性の観念」『国際法外交雑誌』
80巻1、2号(1981)

宮廻 美明 教授

(本学在職期間：平成15年4月～平成22年3月)



昭和44年3月

早稲田大学第一法学部卒業

平成15年4月

本学大学院法学政治学研究科
教授

所属：国際企業法

専門分野：商法

研究内容(代表的な著書や論文等)：

「将来債権の包括的譲渡予約と否認権の行使」(『法律時報』55巻8号1983年)

「譲渡制限株式の譲渡担保の効力」(『ジュリスト増刊・担保法の判例(2)』、1994年)

「内部統制システムにおけるコンプライアンス・システムと日・米・欧の対応」(新堂孝司・山下友信編「会社法と商事法務」247頁、商事法務2008年)

大学院医学系研究科・医学部

新家 眞 教授

(本学在職期間：昭和49年12月～平成22年3月)

<昭和55年8月～昭和56年6月を除く>



昭和49年9月 本学医学部卒業

昭和49年12月

本学医学部附属病院

昭和50年9月

本学医学部附属病院助手

昭和55年8月 関東通信病院

昭和56年7月 本学医学部講師
平成元年12月 本学医学部助教授
平成9年4月 本学大学院医学系研究科教授(現職)
平成19年4月～平成21年3月

本学医学部附属病院外来診療運営部部长
所属：
外科学専攻 感覚・運動機能医学講座 眼科学分野
専門分野：眼科学、緑内障学、眼薬理学、眼循環
研究内容(代表的な著書や論文等)：
「正常眼圧緑内障(共著)」金原出版、2000。
「Tajimi Study(共著)」Ophthalmology, 2004。
「Laser Speckle Flowgraphy(共著)」
Acta Ophthalmologica, 2009。

大学院工学系研究科・工学部

岡 芳明 教授

(本学在職期間：昭和49年4月～平成22年3月)



昭和44年5月
本学工学部原子力工学科卒業
昭和46年3月
本学大学院工学系研究科
原子力工学専攻修士課程修了
昭和49年3月
本学大学院工学系研究科
原子力工学専攻博士課程修了
(工学博士 取得)

昭和49年4月
本学工学部附属原子力工学研究施設助手
昭和53年3月
本学工学部附属原子力工学研究施設助教授
昭和60年1月
本学工学部原子力工学科助教授
平成元年7月
本学工学部附属原子力工学研究施設教授
平成17年4月
本学大学院工学系研究科原子力専攻教授
平成19年6月
グローバルCOEプログラム「世界を先導する原子力
教育研究イニシアチブ」拠点リーダー
所属：原子力専攻原子炉工学講座
専門分野：原子炉工学
研究内容(代表的な著書や論文等)：
1. "Supercritical-pressure, Once-through Cycle Light
Water Cooled Reactor Concept," J. Nucl. Sci. Technol.
38 (12), 1081-1089 (2001).
2. "Fast Neutron Source Reactor and related Nuclear
Engineering Researches of University of Tokyo-A
Comprehensive Review" Progress in Nuclear Energy,
Vol. 32 [1/2], 1-222 (1998).
3. 「原子炉動特性とプラント制御」オーム社、2008年

山地 憲治 教授

(本学在職期間：平成6年8月～平成22年3月)



昭和47年4月
本学工学部原子力工学科卒業
昭和52年3月
本学大学院工学系研究科
原子力工学専門課程博士課程
修了
昭和52年4月
(財)電力中央研究所入所

昭和62年7月
(財)電力中央研究所エネルギー研究室長
平成6年8月
本学大学院工学系研究科電気工学専攻教授
所属：電気系工学専攻
専門分野：エネルギーシステム工学
研究内容(代表的な著書や論文等)：
エネルギー・環境・経済システム論(岩波書店)
システム数理工学(数理工学社)
原子力の過去・現在・未来(コロナ社)

市川 昌和 教授

(本学在職期間：平成13年10月～平成22年3月)



昭和44年3月
早稲田大学理工学部物理学科
卒業
昭和49年3月
早稲田大学大学院理工学研究
科博士課程修了(理学博士)
昭和49年4月～平成13年9月
日立製作所中央研究所

この間(平成6年2月～平成13年9月) 国家プロジェ
クト「アトムテクノロジー研究体」に出向(グループリー
ダー、副プロジェクトリーダー)
平成13年10月～平成15年6月
本学大学院工学系研究科物理工学専攻教授
平成15年7月～平成21年2月
本学大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス
研究センター教授
平成21年3月～現在
本学大学院工学系研究科物理工学専攻教授
所属：物理工学専攻・物理工学講座
専門分野：表面・界面物理、半導体ナノサイエンス・ナ
ノテクノロジー
研究内容(代表的な著書や論文等)：
・ M. Ichikawa, "Crystallographic analysis and
observation of surface micro-areas using microprobe
RHEED" Materials Science Reports Vol.4, p.147-192
(1989).
・ 市川昌和、編著 「アトムテクノロジーへの挑戦1」
p.1～285(日経BP社2001年)
・ M. Ichikawa and A. Shklyaev, "Formation of

Si and Ge nanostructures at given positions by using surface microscopy and ultrathin SiO₂ film technology,” Nanoscience and Technology, Lateral Alignment of Epitaxial Quantum Dots, p.569-588 (Springer, 2007).

吉田 眞 教授

(本学在職期間：平成 14年 4月～平成22年 3月)



(学歴)
昭和44年 5月
本学工学部卒業
昭和63年 2月
工学博士(東京大学)
(職歴)
昭和44年 6月
日本電信電話公社(現NTT)
電気通信研究所入所

平成 7年 7月

NTTアドバンステクノロジー株式会社(NTT-AT)

平成14年 4月 本学大学院工学系研究科教授

併せて、昭和 50年代前半以降、ネットワーク・管理
関連の国際標準化活動に従事

平成20年 1月

本学大学院工学系研究科附属工学教育推進機構
教育プロジェクト室長

所属：工学教育推進機構 教育プロジェクト室

専門分野：

- ・情報通信ネットワーク及びネットワーク管理技術
- ・工学教育の体系化

(工学知の構造化、可視化、体系化、創造性工学教育)

- ・情報技術を用いた工学教育とその応用

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- ・ M. Yoshida: “A Periodically Sampled Queue with Alternate Active and Interruption Phases,” IECIE Trans. E70, 3, 1987.
- ・ 吉田、江尻：「ネットワーク・オペレーション」 オーム社、1994年
- ・ M. Yoshida: “Global Collaboration in the ICT-aided Learning/Education,” International Session on Engineering Education, 54th Annual Meeting, JSEE, Kitakyushu, July, 2006.

難波 和彦 教授

(本学在職期間：平成15年 9月～平成22年 3月)



昭和49年 3月
本学大学院工学系研究科建築
学専攻 博士課程修了
所属：建築学専攻
専門分野：建築意匠

研究内容(代表的な著書や論文等)：

建築・都市におけるサステイナブル・デザイン

『建築の4層構造』(INAX出版 2009)

『建築家は住宅で何を考えているか』(PHP新書 2008)

『箱の家 エコハウスをめざして』(NTT出版 2006)

野坂 正隆 教授

(本学在職期間：平成20年 4月～平成22年 3月)



昭和45年 4月
広島大学工学部精密工学科卒
業
昭和47年 3月
広島大学大学院工学研究科精
密工学専攻修士課程修了
昭和47年 4月
旧科学技術庁航空宇宙技術研
究所入所

昭和58年 9月 広島大学より工学博士の学位授与

平成 5年 4月

旧航空宇宙技術研究所角田支所ロケット流体機器研
究室長

平成13年 4月

旧(独)航空宇宙技術研究所 ロケット推進研究セン
ター長

平成16年10月

(独)宇宙航空研究開発機構宇宙基幹システム本部参
事

平成20年 3月 (独)宇宙航空研究開発機構 定年退職

平成20年 4月 本学大学院工学系研究科機械工学専攻
教授

所属：機械工学専攻 固体力学・材料分野

専門分野：トライボロジー 極限潤滑工学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- (1) 液体水素用高速・接触式メカニカルシールの密封特
性に関する研究(第1報)液体水素ターボポンプ用メカ
ニカルシールの開発, 潤滑, 29, 1 (1984) 35 - 42.
- (2) Tribo-Characteristics of Self-Lubricating Ball
Bearings for the LE-7 Liquid Hydrogen Rocket-
Turbopump, Tribology Transactions, 36, 3 (1993) 30-44.
- (3) Ultra-High-Speed Performance of Ball Bearings
and Annular Seals in Liquid Hydrogen at Up to 3
Million DN (120,000 rpm), Tribology Transactions, 36,
3 (2004) 43-53.

長島 利夫 教授

(本学在職期間：昭和52年 5月～平成22年 3月)

昭和44年 5月 本学工学部卒業

昭和46年 3月 本学大学院工学系研究科修士課程修了

昭和50年 1月 ケンブリッジ大学Ph.D.

昭和52年 5月 本学宇宙航空研究所助手

昭和53年12月 本学宇宙航空研究所講師

昭和56年10月 本学工学部助教授

平成元年12月 本学工学部教授

平成7年4月 本学大学院工学系研究科教授
 平成18年7月 本学大学院新領域創成科学研究科教授
 平成20年11月 本学大学院工学系研究科教授
 平成13年4月～17年3月 工学系国際交流委員長
 平成14年4月～17年3月
 全学国際交流委員会副委員長
 平成17年4月～18年6月 工学系国際交流室長
 所属：航空宇宙工学専攻、
 新領域創成科学研究科(兼担)
 専門分野：航空宇宙推進工学・先端エネルギー工学
 研究内容(代表的な著書や論文等)：
 ガスタービンエンジン(共著、平成12年、朝倉書店)、
 第3版航空宇宙工学便覧(日本航空宇宙学会編B3.1、
 B3.4、C3.5.6項、丸善、平成17年)

西郷 和彦 教授

(本学在職期間：昭和57年4月～平成22年3月)



昭和44年3月
 東京工業大学理工学部 卒業
 昭和51年11月
 理学博士(東京工業大学)
 昭和53年4月
 埼玉大学工学部助教授
 昭和57年4月
 本学工学部合成化学科助教授

平成5年9月 本学工学部合成化学科教授
 平成17年4月～平成21年3月 本学附属図書館長
 所属：化学生命工学専攻
 専門分野：有機合成化学、高分子合成化学、結晶工学
 研究内容(代表的な著書や論文等)：
 1) *Synthesis and Properties of Polyamides Having a Cyclobutanedicarboxylic Acid Derivative as a Component*, Progress in Polymer Science, 1992, 17, 35-86.
 2) *Chiral Discrimination During Crystallization*, Topics in Stereochemistry 23, Chapter 4, 207-265, Wiley-Interscience (2003).
 3) *Resolution of Chiral Drugs and Drug Intermediates by Crystallization*, Chirality in Drug Research, 33, Chapter 5, 127-154, Wiley-VCH (2006)

藤野 陽三 教授

(本学在職期間：昭和52年4月～平成22年3月)



昭和47年4月
 本学工学部土木工学科卒業
 昭和49年3月
 本学大学院工学系研究科
 土木工学専攻修士課程修了
 昭和51年9月
 ウォータール大学博士課程修了 Ph.D

昭和52年4月 本学地震研究所助手

昭和53年4月 筑波大学構造工学系助手
 昭和54年7月 筑波大学構造工学系講師
 昭和57年4月 本学工学部土木工学科助教授
 昭和61年4月 本学工学部附属総合試験所助教授
 平成2年7月 本学大学院工学系研究科教授
 (現在に至る)

平成20年6月
 グローバルCOEプログラム「都市空間の持続再生学の展開」拠点リーダー
 所属：社会基盤学専攻
 専門分野：社会基盤構造学、橋梁工学
 研究内容(代表的な著書や論文等)：
 Encyclopedia of Structural Health Monitoring (構造ヘルスマニタリング百科事典), vols.1-5, pp.1-2709, Wiley, 2009.
 アーバンストックの持続再生、技報堂出版、332 ページ、2007年
 Cable-stayed Bridges, Elsevier, pp.1-438, 1991.
 (4月から工学系研究科特任教授就任に内定)

大学院人文社会系研究科・文学部

逸身 喜一郎 教授

(本学在職期間：1997年4月～2010年3月)



1970年5月
 本学文学部卒業
 1972年3月
 本学大学院人文科学研究科西洋古典学専門課程修士課程修了
 1975年3月
 本学大学院人文科学研究科西洋古典学専門課程博士課程単位取得退学

1983年7月 Ph. D. (Univ. of St. Andrews)
 1984年4月 成城大学文芸学部助教授
 1989年4月～1990年3月
 Visiting Fellow, St. Hugh's College (University of Oxford)
 1991年4月 成城大学文芸学部教授
 1994年4月 都立大学人文学部教授
 1997年4月 本学大学院人文社会系研究科教授
 所属：欧米系文化研究専攻西洋古典学講座
 専門分野：西洋古典学、特にギリシャ・ラテンの韻文
 研究内容(代表的な著書や論文等)
 『ギリシャ・ローマ文学——韻文の系譜』 2000 放送大学教育振興会
 『ソフォクレス『オイディプース王』とエウリーピデース『バッカイ』—ギリシャ悲劇とギリシャ神話』 2008 岩波書店
 Pindaric Metre: The 'Other Half' (Oxford: Oxford University Press, 2009).

今村 啓爾 教授

(本学在職期間：昭和49年8月～平成22年3月)



昭和45年5月
本学文学部考古学専修課程卒業
昭和47年3月
本学大学院人文科学研究科考古学専門課程修士課程修了
昭和49年7月
本学大学院人文科学研究科考古学専門課程博士課程退学

昭和49年8月 本学理学部人類学教室助手
昭和53年4月 本学文学部考古学研究室助手
平成3年4月 本学文学部助教授
平成6年6月 本学文学部教授
平成7年4月 本学大学院人文社会系研究科教授
所属：基礎文化研究専攻考古学講座
専門分野：考古学
研究内容(代表的な著書や論文等)：
Prehistoric Japan ロンドン大学出版 1996年
富本銭と謎の銀銭 小学館 2001年
土器から見る縄文人の生態 同成社 2010年

竹内 整一 教授

(本学在職期間：1998年4月～2010年3月)



1971年6月
本学文学部倫理学科卒業
1974年3月
本学大学院人文科学研究科倫理学専門課程修士課程修了
1975年9月
本学大学院人文科学研究科倫理学専門課程博士課程中途退学

1975年10月 本学文学部倫理学科助手
1978年4月 専修大学文学部人文学科講師
1980年4月 専修大学文学部人文学科助教授
1986年4月 専修大学文学部人文学科教授
1998年4月 本学大学院人文社会系研究科教授
所属：基礎文化研究専攻倫理学講座
専門分野：倫理学
研究内容(代表的な著書や論文等)：
『「おのずから」と「みずから」——日本思想の基層』、春秋社、2004年2月
『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』、筑摩書房、2009年1月
『「かなしみ」の哲学』、NHK出版、2009年12月

上野 善道 教授

(本学在職期間：1982年4月～2010年3月)



1970年5月
本学文学部卒業
1973年3月
本学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了
1973年9月
本学大学院人文科学研究科言語学専門課程博士課程退学

1973年10月 本学文学部助手
1975年4月 弘前大学人文学部講師
1977年4月 金沢大学法文学部講師
1979年4月 金沢大学法文学部助教授
1980年4月 金沢大学文学部助教授
1982年4月 本学文学部助教授
1994年4月 本学文学部教授
1995年4月 本学大学院人文社会系研究科教授
所属：基礎文化研究専攻言語学講座
専門分野：音声学・音韻論、特に日本語アクセント研究。
研究内容(代表的な著書や論文等)：
共著『言語学』(1993初版、2004第2版、東京大学出版会)
編著『朝倉日本語講座3 音声・音韻』(2003、朝倉書店)
論文“Classification of Japanese Accent Systems,” in Shigeki Kaji (ed.) Proceedings of the Symposium ‘Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena, Tonogenesis, Typology, and Related Topics,’ ILCAA, Tokyo:151-186 (1999).

松永 澄夫 教授

(本学在職期間：1985年4月～2010年3月)



1971年6月
本学文学部卒業
1973年3月
本学大学院人文科学研究科哲学専門課程修士課程修了
1975年3月
本学大学院人文科学研究科哲学専門課程博士課程退学

1975年4月 関東学院大学文学部講師
1978年4月 関東学院大学文学部助教授
1979年4月 九州大学教養部助教授
1985年4月 本学文学部助教授
1993年7月 本学文学部教授
1995年4月 本学大学院人文社会系研究科教授
所属：基礎文化研究専攻哲学講座
専門分野：哲学
研究内容(代表的な著書や論文等)：
『知覚する私・理解する私』勁草書房、1993年
『言葉の力・音の経験 第I部・第II部』東信堂、2005年・2006年
『哲学史を読む I・II』東信堂、2008年

大学院理学系研究科・理学部

川島 隆幸 教授

(本学在職期間：昭和49年8月～平成22年3月)



昭和44年4月

本学理学部化学科 卒業

昭和46年3月

本学大学院理学系研究科化学
専門課程修士課程修了

昭和49年3月

本学大学院理学系研究科化学
専門課程博士課程修了

昭和49年8月 本学理学部化学科助手

昭和51年8月～昭和53年9月

米国アイオワ州立大学、ユタ大学 博士研究員

平成2年12月 本学理学部化学科講師

平成4年8月 本学理学部化学科助教授

平成8年4月～平成9年3月

京都大学化学研究所客員助教授(併任)

平成10年5月 本学大学院理学系研究科化学専攻 教授

平成13年1月～平成14年12月 本学低温センター長

所属：化学専攻・有機化学講座

専門分野：有機化学、有機ヘテロ原子化学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

T. Kawashima, K. Kato, and R. Okazaki, "Novel Synthetic Route to Isolable Pentacoordinate 1,2-Oxaphosphetanes and Mechanism of Their Thermolysis, the Second Step of the Wittig Reaction", *J. Am. Chem. Soc.*, 114, 4008-4010 (1992).

J. Kobayashi, K. Goto, and T. Kawashima, "5-Carbaphosphatranes: The First Main Group Atrane Bearing a 1-5 Covalent Bond", *J. Am. Chem. Soc.*, 126, 3387-3388 (2001).

N. Kano, H. Miyake, K. Sasaki, T. Kawashima, N. Mizorogi, and S. Nagase, "Dianionic Species with a Bond of Two Pentacoordinated Silicon Atoms", *Nature Chem.*, 2, 112-116 (2010).

酒井 英行 教授

(本学在職期間：平成元年4月～平成22年3月)



昭和44年3月

東北大学工学部原子核工学科
卒業

昭和46年3月

東京工業大学大学院理工学研
究科(物理学)修士課程修了

昭和47年3月

東京工業大学大学院理工学研
究科(物理学)博士課程退学

昭和47年4月 大阪大学核物理研究センター助手

昭和61年10月 大阪大学核物理研究センター助教授

平成元年4月 本学理学部助教授

平成7年4月 本学大学院理学系研究科教授

平成12年4月～平成17年5月

本学大学院理学系研究科附属原子核科学研究センター長
所属：物理学専攻・量子多体物理学講座

専門分野：原子核物理学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

H. Sakai et al., "Spin correlations of strongly interacting massive fermion pairs as a test of Bell's inequality", *Phys. Rev. Lett.* 97, 150405 (2006).

H. Sakai et al., "Precise measurement of dp elastic scattering at 270 MeV and three-nucleon force effects", *Phys. Rev. Lett.* 84, 5288-5292 (2000).

M. Ichimura, H. Sakai and T. Wakasa, "Spin-isospin responses via (p,n) and (n,p) reactions", *Prog. Part. Nucl. Phys.* 56, 446-531 (2006).

野津 憲治 教授

(本学在職期間：昭和50年11月～昭和51年9月および

昭和62年1月～平成22年3月)



昭和45年3月

本学理学部化学科卒業

昭和47年3月

本学大学院理学系研究科化学
専門課程修士課程修了

昭和50年3月

本学大学院理学系研究科化学
専門課程博士課程修了(理学
博士)

昭和50年11月 本学理学部助手

昭和51年10月 筑波大学化学系講師

昭和62年1月 本学理学部助教授

平成7年8月 本学理学部教授

平成10年4月

本学大学院理学系研究科教授、現在に至る。

平成9年4月～平成13年3月、平成17年4月～平成21年
3月 本学大学院理学系研究科附属地殻化学実験施設長

所属：地殻化学実験施設

専門分野：地球化学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Strontium isotope composition in volcanic rocks from the Northeast Japan arc. K.Notsu, *J. Volcanol. Geotherm. Res.* 32, 195-207 (1983)

Remote detection of HCl and SO₂ in volcanic gas from Unzen volcano, Japan. T.Mori, K.Notsu, Y.Tohjima and H.Wakita, *Geophys. Res. Lett.* 20, 1355-1358 (1993)

「宇宙・地球化学」(単著) 朝倉書店(2010)

大学院農学生命科学研究科・農学部

横山 伸也 教授

(本学在職期間：平成16年3月～平成22年3月)



昭和44年3月
北海道大学理学部化学第二学
科卒業
昭和46年3月
北海道大学大学院理学研究科
化学専攻修士課程修了
昭和49年3月
北海道大学大学院理学研究科
化学専攻博士課程単位取得中
退

昭和49年4月 工業技術院公害資源研究所入所
平成3年10月

資源環境技術総合研究所 温暖化物質循環制御部バイ
オマス研究室長

平成6年4月

資源環境技術総合研究所 温暖化物質循環制御部長

平成13年4月

独立行政法人産業技術総合研究所 中国センター所長

平成16年3月

本学大学院農学生命科学研究科教授

所属：生物・環境工学専攻 生物システム工学講座 生
物機械工学研究室

専門分野：バイオマスエネルギー工学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- ・バイオエネルギー最前線 森北出版 平成13年
- ・バイオマスエネルギー 森北出版 平成21年(共著)
- ・温室効果ガス貯留・固定と社会システム コロナ社
平成21年(共著)

小野寺 節 教授

(本学在職期間：昭和49年4月～平成22年3月)



昭和44年3月
本学農学部卒業
昭和49年3月
本学大学院農学系研究科大学
院修了(農学博士)
昭和49年4月
本学医科学研究所助手

昭和52年7月

米国国立衛生研究所(NIH)上級研究員

昭和59年4月 農林水産省家畜衛生試験場主任研究官

昭和61年4月

農林水産省家畜衛生試験場免疫研究室長

平成3年10月 本学大学院農学系研究科教授

所属：応用動物科学専攻 高次生体制御学講座 応用免
疫学研究室

専門分野：応用免疫学、食品安全学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- ・Onodera, T., Jenson, A.B., Yoon, J.W., and Notkins, A.L. (1978) Virus-induced diabetes mellitus: Reovirus infection of pancreatic B cells in mice. Science 201:529-531.
- ・Kuwahara, C., Takeuchi, A.M., Nishimura, T., Haraguchi, K., Kubosaki, A., Matsumoto, Y., Saeki, K., Matsumoto, Y., Yokoyama, T., Itoharu, S., and Onodera, T. (1999) Prions prevent neuronal cell-line death. Nature 400:225-226, 1999.
- ・Park, J.S., Onodera, T., Nishimura, S., Thompson, R.F., and Itoharu, S. (2006) Molecular evidence for two-stage learning and partial laterality in eyeblink conditioning of mice. Proc. Natl. Acad. Sci. USA, 103:5549-5554.

阿部 啓子 教授

(本学在職期間：平成4年1月～平成22年3月)



昭和44年3月
お茶の水女子大学家政学部食
物学科卒業
昭和46年3月
お茶の水女子大学大学院家政
学研究科食物学専攻修士課程
修了

昭和46年4月 本学医学部研究生

昭和48年5月

アメリカ合衆国デューク大学医学部神経学科研究員

昭和57年4月 お茶の水女子大学家政学部文部技官

平成4年1月 本学農学部助手

平成6年6月

本学大学院農学生命科学研究科助教授

平成8年4月

本学大学院農学生命科学研究科教授

平成20年4月 神奈川科学技術アカデミー「食の安全・
安心」プロジェクト代表(併任)

所属：応用生命化学専攻 生物機能化学講座 生物機能
開発化学研究室

専門分野：味覚科学、機能性食品学

藏田 憲次 教授

(本学在職期間：昭和58年4月～平成22年3月)



昭和47年4月
本学農学部卒業
昭和53年3月
本学大学院農学系研究科博士
課程修了
昭和60年4月
本学農学部助教授

平成9年7月

本学大学院農学生命科学研究科教授

所属：生物・環境工学専攻 生物システム工学講座 生

物環境工学研究室

専門分野：生物環境工学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- ・編著 Transplant Production Systems, Kluwer Academic Publishers,1992.
- ・Microclimate, Encyclopedia of Agricultural Science, Vol. 3, 51-61, Academic Press, 1994.
- ・Effects of dissolved oxygen concentration on somatic embryogenesis, In: Plant Tissue Culture Engineering, 339-353, Springer, 2006.

大学院経済学研究科・経済学部

藤原 正寛 教授

(本学在職期間：昭和59年4月～平成22年3月)



昭和44年6月

本学経済学部経済学科卒業

昭和49年1月

スタンフォード大学経済学部

大学院修了

昭和59年4月

本学経済学部助教授

平成元年4月

本学経済学部教授

平成8年4月 本学大学院経済学研究科教授

所属：現代経済専攻 現代経済学講座

専門分野：経済理論、公共経済学

研究内容(代表的な著書や論文等)

"Voluntarily Separable Repeated Prisoner's Dilemma",
Review of Economic Studies, 2008.

"Bargaining and Market Behavior in Jerusalem,
Ljubljana, Pittsburgh, and Tokyo: An Experimental
Study," American Economic Review, 1991.

・「産業政策の経済分析」、1988、東京大学出版会

岩井 克人 教授

(本学在職期間：昭和56年6月～平成22年3月)



昭和44年6月

本学経済学部経済学科卒業

昭和47年6月

マサチューセッツ工科大学

大学院経済学博士課程修了

昭和48年7月

イエール大学経済学部助教授

昭和54年7月

イエール大学コウルズ経済研究所上級研究員

昭和56年6月 本学経済学部助教授

平成元年4月 本学経済学部教授

平成8年4月 本学大学院経済学研究科教授

平成11年10月～平成13年3月 本学評議員

平成13年10月～平成15年9月

本学大学院経済学研究科長・経済学部長

所属：経済理論専攻 経済理論講座

専門分野：経済理論、法理論

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- ・ *Disequilibrium Dynamics - A Theoretical Analysis of Inflation and Unemployment* (Yale University Press, 1981).
- ・『貨幣論』(筑摩書房, 1993.3, ちくま学芸文庫, 1998.3)
- ・『会社はこれからどうなるのか』(平凡社, 2003.2, 平凡社ライブラリー, 2009.9)

醍醐 聰 教授

(本学在職期間：昭和63年4月～平成22年3月)



昭和45年3月

京都大学経済学部卒業

昭和47年3月

京都大学大学院経済学研究科

修士課程修了

昭和49年3月

京都大学大学院経済学研究科

博士課程退学

昭和63年4月 本学経済学部助教授

平成元年12月 本学経済学部教授

平成8年4月 本学大学院経済学研究科教授

平成10年10月～平成12年9月 本学評議員

所属：金融システム専攻 会計・財務講座

専門分野：財務会計論

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- ・『日本の企業会計』1990年、東京大学出版会
- ・『労使交渉と会計情報——日本航空における労働条件の不利益変更をめぐる経営と会計』2005年、白桃書房
- ・『会計学講義』1998年、初版；2008年、第4版、東京大学出版会

大学院総合文化研究科・教養学部

今井 知正 教授

(本学在職期間：昭和63年4月～平成22年3月)



昭和47年3月

本学文学部卒業

昭和51年3月

本学大学院人文科学研究科中

退

昭和51年4月

千葉大学人文学部助手

昭和52年1月

千葉大学人文学部講師

昭和55年8月 千葉大学人文学部助教授

昭和63年4月 本学教養学部助教授

平成6年4月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

所属：広域科学専攻 関連基礎科学系

専門分野：哲学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

著書：

『哲学原典資料集』（共著，東京大学出版会，1993年）

論文：

「自己知の謎」（『哲学雑誌』第103巻第775号，1988年）

「議論Rの構造」（『哲学・科学史論叢』第九号，2007年）

下井 守 教授

（本学在職期間：昭和50年5月～平成22年3月）



昭和44年4月

本学理学部化学科卒業

昭和46年3月

本学大学院理学系研究科修士課程修了

昭和46年4月

財団法人相模中央化学研究所

昭和50年5月 本学教養学部助手

昭和61年3月 東北大学理学部助教授

平成4年3月 本学教養学部助教授

平成7年4月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

所属：

広域科学専攻相関基礎科学系、
教養学部附属教養教育開発機構・教養教育社会連携（ベ
ネッセコーポレーション）寄付研究部門兼務

専門分野：無機化学、錯体化学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

遷移金属錯体によるホウ素水素化合物の活性化。

『基礎無機化学』東京化学同人（2009）。

Coordination compounds of Monoborane-LewisBase
Adducts: Syntheses and Structures of $[M(CO)_5(h^1-BH_3L)]$ ($M = Cr, Mo, W; L = NMe_3, PMe_3, PPh_3$),
J. Am. Chem. Soc., 121, 11704-11712 (1999) (共著)。

Syntheses and Structures of $[M(CO)_5(B_2H_4 \cdot 2P(CH_3)_3)]$
and $[M(CO)_4(B_2H_4 \cdot 2P(CH_3)_3)]$ ($M = Cr, Mo, W$).

Inorg. Chem., 31, 670-675 (1992) (共著)。

山崎 泰規 教授

（本学在職期間：昭和63年3月～平成22年3月）



昭和48年3月

大阪大学理学部物理学科卒業

昭和53年3月

大阪大学大学院工学研究科修了(工学博士)

昭和53年6月

東京工業大学原子炉工学研究
所助手

昭和63年3月 本学教養学部助教授

平成5年12月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

所属：広域科学専攻相関基礎科学系

専門分野：粒子線物理学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

S. Ninomiya, Y. Yamazaki, F. Koike, H. Masuda, T. Azuma, K. Komaki, K. Kuroki, and M. Sekiguchi, "Stabilized hollow ions extracted in vacuum," *Phys. Rev.Lett.* 78 (1997) 4557-4560.

Y. Iwai, T. Ikeda, T. M. Kojima, Y. Yamazaki, K. Maeshima, N. Imamoto, T. Kobayashi, T. Nebiki, T. Narusawa, G. P. Pokhil, "Ion irradiation in liquid of μm^3 region for cell surgery," *Appl. Phys. Lett.* 92 (2008) 023509.

N. Kuroda, H.A. Torii, M. Shibata, Y. Nagata, D. Barna, M. Hori, D. Horvath, A. Mohri, J. Eades, K. Komaki, and Y. Yamazaki, "Radial compression of antiproton cloud for production of intense antiproton beams," *Phys.Rev.Lett.* 100 (2008) 203402.

米谷 民明 教授

（本学在職期間：昭和55年4月～平成22年3月）

昭和44年3月 北海道大学理学部卒業

昭和49年3月 北海道大学大学院理学研究科修了

昭和50年6月 北海道大学理学部助手

昭和55年4月 本学教養学部助教授

平成3年7月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

所属：広域科学専攻相関基礎科学系

専門分野：理論物理学(素粒子論)

研究内容(代表的な著書や論文等)：

場の量子論、および、超弦理論と中心とした、重力を含む素粒子の統一理論の構築(論文等は省略)

兵頭 俊夫 教授

（本学在職期間：昭和46年10月～平成22年3月）



昭和44年3月

本学教養学部基礎科学科卒業

昭和46年3月

本学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了

昭和46年10月

本学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程退学、本学教養学部助手

昭和62年1月 本学教養学部助教授

平成4年4月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

平成17年4月

本学教養学部附属教養教育開発機構教授

平成9年4月～平成10年3月 本学総長補佐

平成15年4月～平成17年3月 本学評議員

平成17年4月～平成19年3月 本学駒場図書館長

所属：広域科学専攻相関基礎科学系・教養教育開発機構
開発部門

専門分野：陽電子消滅法を用いた原子分子及び固体物性

の実験的研究、ナノ切削法を用いた材料表面の機械的強度・薄膜の接着強度の評価、物理教育・理科教育にも関心がある。

研究内容(代表的な著書や論文等)：

F. Saito, I. Nishiyama, and T. Hyodo, "Application of Nano-Cutting for Mechanical Characterization of Materials", *Mat. Lett.* 63 (2009) 2257-2259.

H. Saito and T. Hyodo, "Experimental Evidence for Spin-Orbit Interactions in Positronium-Xe Collisions" *Phys. Rev. Lett.* 97 (2006) 253402-1-4.

「考える力学」(学術図書出版社刊 2001)

菅原 正 教授

(本学在職期間：昭和61年5月～平成22年3月)



昭和44年4月

本学理学部化学科卒業

昭和49年3月

本学大学院理学系研究科博士課程化学専攻修了(理学博士)

昭和50年9月

米国ミネソタ大学博士研究員

昭和52年8月

米国メリーランド大学博士研究員

昭和53年3月

岡崎国立協同研究機構分子科学研究所助手

昭和61年5月 本学教養学部助教授

平成3年6月 本学教養学部教授

平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授

所属：広域科学専攻相関基礎科学系

専門分野：物理有機化学、有機物性化学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

K. Takakura, T. Toyota, T. Sugawara, A Novel System of Self-Reproducing Giant Vesicles, *J. Am. Chem. Soc.*, 125, 8134-8140, (2003).

M. M. Matsushita, H. Kawakami, T. Sugawara, Molecule-based system with coexisting conductivity and magnetism and without magnetic inorganic ions. *Phys. Rev. B*, 77, 195208 (2008).

H. Terao, T. Sugawara, Y. Kita, N. Sato, E. Kaho, S. Takeda, Proton Relay in a One-Dimensional Hydrogen-Bonded Chain Composed of Water Molecules and a Squaric Acid Derivative. *J. Am. Chem. Soc.*, 123, 10468-10474 (2001).

(※写真：東京大学新聞社提供)

大学院教育学研究科・教育学部

衛藤 隆 教授

(本学在職期間：昭和56年1月～平成22年3月)



昭和47年4月

本学医学部保健学科卒業

昭和51年3月

本学医学部医学科卒業

昭和51年5月

本学医学部附属病院研修医

昭和52年5月 静岡県浜松市遠州総合病院 小児科医師

昭和54年5月 東京通信病院 小児科医師

昭和56年1月 本学医学部附属病院 助手

昭和61年4月 国立公衆衛生院 室長

昭和62年3月 医学博士(東京大学)

昭和64年1月 本学医学部講師(併任)

平成7年4月 本学大学院教育学研究科教授

平成18年4月～平成20年3月

本学教育学部附属中等教育学校長(兼務)

平成21年4月

本学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター長(兼務)

所属：総合教育科学専攻 身体教育学コース

専門分野：健康教育学、学校保健、小児保健、小児科学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

1. 衛藤 隆、中原俊隆編「学校医・学校保健ハンドブックー必要な知識と視点のすべてー」、文光堂、東京、2006.
2. 衛藤 隆、他編「最新 Q&A 教師のための救急百科」、大修館書店、東京、2006.
3. 衛藤 隆、他編「新世紀の小児保健」、第3版、日本小児医事出版社、東京、2008.

金子 元久 教授

(本学在職期間：平成5年10月～平成22年3月)



昭和47年3月

本学教育学部卒業

昭和49年3月

本学大学院教育学研究科修士課程修了

昭和59年8月

シカゴ大学Ph.D.

平成5年10月

本学教育学部助教授

平成8年4月 本学大学院教育学研究科教授

平成8年5月 本学大学総合教育研究センター長

平成16年4月 本学評議員

平成18年4月～平成21年3月

大学院教育学研究科長・教育学部長

所属：総合教育科学専攻 大学経営・政策コース

専門分野：高等教育論

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『大学の教育力』、筑摩書房、2007年9月
Past and Future of Asian Higher Education: Baltimore:
Johns Hopkins University Press, 2004. (共著).
『近未来の大学像』玉川大学出版会、1995年(編著)

大学院薬学系研究科・薬学部

佐藤 能雅 教授

(本学在職期間 昭和63年10月～平成22年3月)



昭和47年3月
本学薬学部卒業
昭和52年3月
本学大学院薬学系研究科博士
課程修了 薬学博士
昭和52年6月
米国国立衛生研究所研究員

昭和55年9月 本学薬学部研究員
昭和56年4月 高エネルギー物理学研究所助手
昭和62年1月 高エネルギー物理学研究所助教授
昭和63年10月 本学薬学部教授

所属：

機能薬学専攻生体分子機能学講座蛋白構造生物学分野
専門分野：構造生物学、X線結晶学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

タンパク質などの生体関連分子の機能とX線解析による三次元構造の研究。

Y. Anraku and Y. Satow. "Reflections on protein splicing: structures, functions and mechanisms," Proc. Jpn. Acad., Ser. B 85, 409-421, 2009.

U. Ohto, K. Fukase, K. Miyake, and Y. Satow. "Crystal Structures of Human MD-2 and Its Complex with Antiendotoxic Lipid IVa," Science 316, 1632-1634, 2007.
J.L. Smith, E.J. Zulec, J.-P. Wery, L. Niu, R.L. Switzer, H. Zalkin, and Y. Satow. "Structure of the Allosteric Regulatory Enzyme of Purine Biosynthesis," Science 264, 1427-1433, 1994.

柴崎 正勝 教授

(本学在職期間：平成3年7月～平成22年3月)



昭和44年3月
本学薬学部卒業
昭和49年3月
本学大学院薬学系研究科博士
課程修了 薬学博士
昭和49年6月
ハーバード大学博士研究員

昭和52年4月

帝京大学薬学部講師

昭和54年4月 帝京大学薬学部助教授

昭和58年4月

財団法人相模中央化学研究所主任研究員

昭和61年10月 北海道大学薬学部教授

平成3年7月 本学薬学部教授(併任)

平成3年10月 本学薬学部教授

平成13年4月～平成15年3月 本学評議員

平成18年4月～平成20年3月

本学大学院薬学系研究科長・薬学部長

所属：分子薬学専攻医薬化学講座有機合成化学分野

専門分野：有機合成化学、不斉触媒開発

研究内容(代表的な著書や論文等)

"Catalytic Asymmetric Nitroaldol Reaction Using Optically Active Rare Earth BINOL Complex: Investigation of the Catalyst Structure" J. Am. Chem. Soc., 115, 10372-10373 (1993).

"Direct Catalytic Asymmetric Aldol Reaction" J. Am. Chem. Soc., 121, 4168-4178 (1999).

"Switching Enantiofacial Selectivities Using One Chiral Source: Catalytic Enantioselective Synthesis of the Key Intermediate for (20S)-Camptothecin Family by (S)-Selective Cyanosilylation of Ketones" J. Am. Chem. Soc., 123, 9908-9909 (2001).

大学院数理科学研究科

岡本 和夫 教授

(本学在職期間 昭和48年4月～平成22年3月)



昭和45年3月

本学理学部卒業

昭和47年3月

本学大学院理学系研究科修士

課程修了

昭和48年3月

本学大学院理学系研究科博士

課程中退

昭和48年4月 本学理学部助手

昭和53年7月 理学博士(東京大学)

昭和56年4月 一橋大学助教授

昭和58年4月 本学教養学部助教授

平成2年4月 本学教養学部教授

平成4年4月

本学大学院数理科学研究科教授、現在に至る

平成10年4月～平成14年3月

本学大学院数理科学研究科長

平成14年4月

本学大学総合教育研究センター長、現在に至る

平成18年4月

本学大学院教育学研究科教授を兼任、現在に至る

所属：数理科学専攻、数学構造論講座

専門分野：可積分系の理論、数学教育

研究内容(代表的な著書や論文等)：

K. Okamoto. Studies on the Painlevé equations. I. Sixth Painlevé equation, P_VI. Ann. Mat. Pura Appl. (4) 146 (1987), 337-381.

T. Tsuda, K. Okamoto and H. Sakai. Folding transformations of the Painlevé equations. Math. Ann. 331 (2005), 713-738.

パウルヴェー方程式、岩波書店、2009年2月、286ページ、
岡本和夫

森田 茂之 教授

(本学在職期間：昭和46年4月～平成22年3月)



昭和44年5月
本学理学部数学科卒業
昭和46年3月
本学大学院理学系研究科数学
専攻修士課程修了
昭和46年4月
本学理学部助手
昭和51年2月
理学博士(東京大学)

昭和51年4月 大阪市立大学理学部講師
昭和51年10月 大阪市立大学理学部助教授
昭和53年4月 本学教養学部助教授
昭和61年4月 東京工業大学理学部教授
平成7年10月 本学大学院数理学研究科教授(現職)

所属：数理幾何学講座

専門分野：位相幾何学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- (1) Shigeyuki Morita, Characteristic classes of surface bundles, Invent. Math. 90 (1987), 551-577.
- (2) Shigeyuki Morita, Abelian quotients of subgroups of the mapping class group of surfaces, Duke Math. J. 70 (1993), 699-726.
- (3) 微分形式の幾何学, 岩波書店 (2005).

大学院新領域創成科学研究科

吉田 恒昭 教授

(本学在職期間：平成9年1月～平成22年3月)



(学歴)
昭和46年6月
東北大学工学部土木工学科卒業
昭和53年4月
ロンドン大学経済学部修士課程修了
平成4年12月
博士(工学)(東京大学)

(職歴)

平成元年1月～平成12年3月

本学大学院工学系研究科教授

平成16年4月～平成22年3月

本学大学院新領域創成科学研究科教授

所属：

国際協力学専攻 開発協力講座 環境技術政策学分野

専門分野：アジア途上国開発計画、とりわけ開発とインフラ(交通と水資源)計画

研究内容(代表的な著書や論文等)：

著書：アジア型開発の課題と展望 1997年 名古屋大学出

版会(アジア太平洋賞特別賞受賞)

Systems for Infrastructure Development - Japan's Experience 1999年 Japan International Cooperation Publishing Co., Ltd. (日本港湾協会論文賞受賞)

杉浦 清了 教授

(本学在職期間：平成7年4月～平成22年3月)



(学歴)
昭和50年3月
本学工学部化学工学科卒業
昭和57年3月
本学医学部医学科卒業
平成7年1月
本学大学院医学系研究科第一
臨床医学専攻博士課程修了

(職歴)

平成7年4月 本学医学部附属病院助手

平成14年4月

本学大学院新領域創成科学研究科教授

所属：人間環境学専攻 人間支援環境学講座 人間環境測定学分野

専門分野：

循環器病学、心臓生理学、心臓シミュレーション

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Sugiura S, Hunter WC, Sagawa K (1989) Long-term versus short term history of ejection as determinants of canine ventricular end-systolic pressure. Circ. Res. 64:255-264.

Sugiura S., Kobayakawa N., Fujita H., Yamashita H., Momomura S., Chaen S., Omata M., Sugi H. (1998) Comparison of unitary displacements and forces between two cardiac myosin isoforms by the optical trap technique: Molecular basis for cardiac adaptation Circ. Res. 82:1029-1034.

Sugiura S, Nishimura S, Yasuda SI, Hosoya Y, Katoh K, Carbon fiber technique for the investigation of single cell mechanics in intact cardiac myocytes Nature Protocols 3:1453-1457 (2006).

鳥海 光弘 教授

(本学在職期間：昭和48年11月～平成22年3月)



(学歴)

昭和44年3月
本学理学部地質学鉱物学卒業
昭和46年3月
本学大学院理学系研究科地質学専門課程修士課程修了

昭和48年11月

本学大学院理学系研究科地質学専門課程博士課程修了
(職歴)

昭和48年11月 本学総合研究資料館助手
昭和53年6月 愛媛大学理学部助教授
昭和60年7月 本学理学部助教授
平成3年8月 本学理学部教授
平成5年4月 本学大学院理学系研究科教授
平成11年4月 本学大学院新領域創成科学研究科教授
(役職歴)

平成6年4月～平成7年3月 本学理学部地学科長
平成17年4月～平成19年3月

本学大学院新領域創成科学研究科 副研究科長
所属：複雑理工学専攻 複雑系実験講座 巨視的複雑系科学分野

専門分野：レオロジー、岩石学、複雑地球惑星科学
研究内容(代表的な著書や論文等)：

Annealing Time-Scale of the Cratonic Lithosphere of Southern Africa Inferred from the Shape of Inclusion Minerals. INTERNATIONAL GEOLOGY REVIEW 50 (1) : 84-88. 2008. Katayama I, Komiya T, Toriumi M.
Pressure effect of self-diffusion in periclase (MgO) by molecular dynamics. JOURNAL OF GEOPHYSICAL RESEARCH-SOLID EARTH 112 (B4) :B04206. 2007. Ito Y, Toriumi M.

ヒマラヤ山脈のあたらしい理解ー巨大な板状岩塊マントルを浮上して山脈をつくるー雑誌「科学」、76巻、9号、877-884頁、鳥海光弘

情報理工学系研究科

南谷 崇 教授

(本学在職期間：平成7年11月～平成22年3月)



昭和44年5月
本学工学部計数工学科卒業
昭和46年3月
本学大学院工学系研究科計数工学専攻修士課程修了
昭和56年4月
東京工業大学工学部情報工学科助教授

平成元年4月

東京工業大学工学部電気電子工学科教授
平成7年11月
本学大学院工学系研究科計数工学専攻教授
平成8年10月

本学先端科学技術研究センター教授
平成13年4月～平成16年3月
本学評議員・先端科学技術研究センター長
平成21年10月

本学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻教授
所属：システム情報学専攻
専門分野：情報工学、計算工学
研究内容(代表的な著書や論文等)：

Takashi Nanya, et al. "Error secure/propagating concept and its application to the design of strongly fault secure processors," IEEE Trans. on Computers, Vol.37, No.1, pp.14-24 (Jan. 1988).

Takashi Nanya et al. "TITAC: Design of a Quasi-Delay-Insensitive Microprocessor," IEEE Design & Test of Computers, Vol.11, No.2, pp.50-63 (Summer 1994).

南谷 崇:フォールトトレラントコンピュータ(オーム社、1991年)

竹内 郁雄 教授

(本学在職期間:平成17年4月～平成22年3月)



昭和44年5月
本学理学部数学科卒業
昭和46年3月
本学大学院理学系研究科数学専攻修士課程修了
昭和46年4月
日本電信電話公社電気通信研究所

昭和62年7月

NTT ソフトウェア研究所ソフトウェア基礎技術研究部グループリーダー

平成元年7月

NTT 基礎研究所情報科学研究部竹内研究グループリーダー

平成6年7月

NTT ソフトウェア研究所広域コンピューティング研究部主幹研究員

平成9年4月

電気通信大学 電気通信学部 情報工学科 教授

平成17年4月

本学大学院情報理工学系研究科創造情報学専攻 教授
所属：創造情報学専攻
専門分野：プログラミング言語, マルチエージェントシステム, IT防災システム

研究内容(代表的な著書や論文等)

竹内郁雄:「新科学対話」, アスキー出版, 1997.

Ikuo Takeuchi, Masaharu Yoshida, Kenichi Yamazaki, Yoshiji Amagai: Lightweight Processes for Real-Time

Symbolic Processing, Yuasa, T. and Okuno, H.G. (Eds.)
Advanced Lisp Technology, Advanced Information
Processing Technology, Vol.4, Taylor and Francis
Publishers, pp.135-154, 2002.

I.Takeuchi, Y. Amagai, M. Yoshida, and K. Yamazaki:
A concurrent real-time garbage collector, 情報処理学
会論文誌 プログラミング, Vol.44, No.SIG 16 (PRO20),
pp.41-55, 2003.

大学院情報学環

石上 英一 教授

(本学在職期間：昭和49年4月～平成22年3月)



昭和45年3月
本学文学部卒業
昭和47年3月
本学大学院人文科学研究科博
士課程修了
昭和49年3月
本学大学院人文科学研究科博
士課程退学

昭和49年4月 本学史料編纂所教務職員

昭和50年1月 本学史料編纂所助手

昭和59年4月 本学史料編纂所助教授

平成4年4月 本学史料編纂所教授

平成10年5月 博士(文学)(東京大学)

平成11年4月～13年3月、平成15年4月～17年3月

本学史料編纂所長

平成20年4月

本学大学院情報学環教授(兼任、本学史料編纂所教授)

所属：情報学環 社会情報学圏

史料編纂所 画像史料解析センター(兼任)

専門分野：日本古代史(律令法と社会構造、古代荘園絵図、
古代史料論)、古奄美諸島史

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『日本古代史科学』、東京大学出版会、1997年

『古代荘園史料の基礎的研究』上・下、塙書房、1997年 第
20回角川源義賞受賞(1998年)

『律令国家と社会構造』、名著刊行会、1996年

地震研究所

金沢 敏彦 教授

(本学在職期間：昭和53年4月～平成22年3月)



昭和46年3月

本学理学部卒業

昭和53年3月

本学大学院理学系研究科地球

物理学専門課程博士課程単位

取得退学

昭和53年4月

本学理学部助手

昭和55年12月 理学博士(東京大学)

昭和57年8月 本学理学部附属地殻化学実験施設助手

平成2年10月

本学理学部附属地殻化学実験施設助教授

平成7年6月

本学地震研究所附属地震地殻変動観測センター教授
(現職)

平成9年4月

本学地震研究所附属地震地殻変動観測センター長(兼
務)(現職)

所属：地震地殻変動観測センター

専門分野：海底地震学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

金沢敏彦・篠原雅尚・塩原肇、海底地震観測の最近の進
展 - 海底地震観測システムと海底における自然地震観
測の進展について - ,地震2, 61, S55-S68, 2009.

Kanazawa, T. and M. Shinohara, A New, Compact
Ocean Bottom Cabled Seismometer System, Sea
Technology, 50, 7, 37-40, 2009.

Kanazawa, T., K. Suyehiro, N. Hirata and M. Shinohara,
Performance of the ocean broadband downhole
seismometer at Site 794, Proc. ODP Scientific Results,
127/128, 2, 1157-1171, 1992.

佐野 修 教授

(本学在職期間：平成13年4月～平成22年3月)



昭和46年

京都大学工学部資源工学科卒
業

昭和48年

京都大学大学院工学研究科資
源工学専攻修士課程修了

昭和54年

京都大学大学院工学研究科資源工学専攻博士課程修了

昭和63年 山口大学工学部資源工学科助教授

平成9年 山口大学工学部社会建設工学科教授

平成11年～平成13年

山口大学総合情報処理センター長

平成13年 本学地震研究所教授(現職)

所属：地震地殻変動観測センター

専門分野：観測地殻物理

研究内容(代表的な著書や論文等)：

ストレスコーションクラッキング、時間依存性変形と破壊現象、配向性亀裂による弾性的異方性、地殻変動観測技術開発研究、地殻応力測定手法.

(1) O. Sano, I. Ito, M. Terada, Influence of strain rate on dilatancy and strength of Oshima Granite, J. Geophys. Res., Vol. 86, B10, pp. 9299-9311, 1981.

(2) O. Sano, Y. Kudo, Y. Mizuta, Experimental Determination of Elastic Constants of Oshima Granite, Barre Granite and Chelmsford Granite, J. Geophys. Res., Vol. 97, No. B3, pp. 3367-3379, 1992.

(3) T. Ito, A. Igarashi, H. Kato, H. Ito, O. Sano, Crucial Effects of System Compliance on the Maximum Stress Estimation in the Hydrofracturing Method, Earth Planets Space, Vol. 58, pp. 963-971, 2006.

藤井 敏嗣 教授

(本学在職期間：昭和 50年 5月～平成22年 3月)



昭和45年 3月

本学理学部卒業

昭和50年 3月

本学大学院理学系研究科修士
理学博士

昭和50年 5月

本学理学部助手

昭和59年 3月 本学地震研究所助教授

平成元年 6月 本学地震研究所教授

平成9年 4月～平成13年 3月 本学地震研究所長

平成16年 4月～平成17年 3月 本学理事(副学長)

所属：火山噴火予知研究センター

専門分野：マグマ学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

「地震・津波と火山の事典」(共編)、丸善、2008年

Mibe, K., Fujii, T., and Yasuda, A., Composition of aqueous fluid coexisting with mantle minerals at high pressure and its bearing on the differentiation of the Earth's mantle, Geochim. Cosmochim. Acta, 66, 12, 2273-2285, 2002.

Fujii, T., Genesis of mid-ocean ridge basalts. In Magmatism in the Ocean Basins (eds. Saunders, A.D. & Norry, M.J.), Geological Society Special Publication No.42, 137-146, 1989.

渡辺 秀文 教授

(本学在職期間：昭和60年 1月～平成22年 3月)



昭和47年 3月

本学理学部卒業

昭和52年 3月

本学大学院理学系研究科博士
課程修了(理学博士)

昭和52年 4月

北海道大学理学部助手

昭和60年 1月 本学地震研究所助教授

平成10年 4月 本学地震研究所教授(現職)

所属：火山噴火予知研究センター

専門分野：火山物理学・火山噴火予測論

研究内容(代表的な著書や論文等)：

1. Watanabe, H., Gradual bubble growth in dacite magma as a possible cause of the 1977-1978 long-lived activity of Usu volcano, J. Volcanol. Geotherm. Res., 20, 133-144, 1984.

2. Watanabe, H., S. Okubo, T. Maekawa, and S. Sakashita, Drain-back process of basaltic magma in the summit conduit detected by microgravity observation at Izu-Oshima volcano, Japan, Geophys. Res.Lett., 25, 2865-2868, 1998.

3. 渡辺秀文、伊豆大島火山 1986年噴火の前兆過程とマグマ供給システム、火山、43, 271-282, 1998.

東洋文化研究所

関本 照夫 教授

(本学在職期間 昭和62年 4月～平成22年 3月)



昭和47年 3月

本学教養学部教養学科卒業

昭和49年 3月

本学大学院社会学研究科修士
課程修了

昭和62年 4月

本学東洋文化研究所助教授

平成3年 4月 本学東洋文化研究所教授

平成18年 4月～平成21年 3月 本学東洋文化研究所長

所属：汎アジア研究部門

専門分野：文化人類学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

・『国民文化が生れる時－アジア・太平洋の現代とその伝統』(共編著)リプロポート、1994

・Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia (Toyota Foundation Research Grant Report), Institute of Oriental Culture: 2000.

・「ものを作る技の考察」松井健編『自然の資源化』(資源人類学、第6巻)弘文堂、2007

社会科学研究所

工藤 章 教授

(本学在職期間 1975年4月～2010年3月)

1969年6月 本学経済学部卒業
1972年3月 本学大学院経済学研究科修士課程修了
1978年4月 信州大学助教授
1980年4月 本学教養学部助教授
1991年4月 本学社会科学研究所助教授
1992年4月 本学社会科学研究所教授(現職)

所属：比較現代経済部門

専門分野：ヨーロッパ経済

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 1) Japanese-German Business Relations. Cooperation and Rivalry in the Inter-war Period, London: Routledge, 1998.
- 2) 『現代ドイツ化学企業史－I G フェルペンの成立・展開・解体』(ミネルヴァ書房、1999年.)
- 3) 『20世紀ドイツ資本主義－国際定位と大企業体制』(東京大学出版会、1999年.)

小森田 秋夫 教授

(本学在職期間：1988年4月～2010年3月)



1970年3月 本学法学部卒業
1972年3月 本学大学院法学政治学研究科修士課程修了
1976年3月 本学大学院法学政治学研究科博士課程修了

1976年3月 博士(法学)(東京大学)
1978年4月 北海道大学助教授
1985年1月 北海道大学教授
1988年4月 本学社会科学研究所助教授
1993年4月 本学社会科学研究所教授(現職)
2005年4月～2009年3月 本学社会科学研究所長

所属：比較現代法部門

専門分野：ロシア法、東欧法

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 1) 『体制転換と法－ポーランドの道の検証』有信堂、2008年
- 2) 『現代ロシア法』(編)東京大学出版会、2003年
- 3) 『市場経済化の法社会学』(編)有信堂、2001年

中村 民雄 教授

(本学在職期間 平成11年9月～平成22年3月)



昭和58年3月 本学法学部卒業
昭和61年3月 本学大学院法学政治学研究科修士課程修了
昭和62年9月 ロンドン大学ロンドン経済政治学院修士課程修了
平成3年9月 博士(法学)(東京大学)

平成3年4月 成蹊大学助教授

平成11年4月 成蹊大学教授

平成11年9月 本学社会科学研究所助教授

平成18年4月 本学社会科学研究所教授(現職)

所属：比較現代法部門

専門分野：イギリス法、EU法、地域統合法の研究

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 1) 『イギリス憲法とEC法』(東京大学出版会、1993年)
- 2) 『欧州憲法条約一解説及び翻訳一』(衆議院憲法調査会事務局、2004年)
- 3) East Asian Regionalism from a Legal Perspective (T. Nakamura ed., Routledge, 2009)

生産技術研究所

山本 良一 教授

(本学在職期間：昭和51年3月～平成22年3月)



昭和44年3月 本学工学部冶金学科卒業
昭和46年3月 本学大学院工学系研究科冶金学専門課程修士課程修了
昭和49年3月 本学大学院工学系研究科冶金学専門課程博士課程修了

昭和51年3月 本学工学部助手

昭和54年6月 本学工学部講師

昭和55年6月 本学工学部助教授

平成元年7月 本学工学部教授

平成13年4月～平成15年3月

本学国際・産学共同研究センター長兼任

所属：サステイナブル材料国際研究センター

専門分野：エコデザイン学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- ・地球を救うエコマテリアル革命 徳間書店、1995年
- ・エコデザイン ダイアモンド社、1999年
- ・残された時間 ダイアモンド社、2005年

藤森 照信 教授

(本学在職期間：昭和57年11月～平成22年3月)



昭和46年3月
東北大学工学部建築学科卒業
昭和48年3月
本学大学院工学系研究科建築
学専門課程修士課程修了
昭和53年3月
本学大学院工学系研究科建築
学専門課程博士課程単位取得
退学

昭和55年3月 工学博士(東京大学)
昭和57年11月 本学生産技術研究所講師
昭和60年8月 本学生産研究所助教授
平成8年7月 本学国際・産学共同研究センター教授
所属：人間・社会系部門 都市・建築史学分野
専門分野：都市環境史学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

(著書)明治の東京計画、岩波書店、1982、日本の近代建築、岩波書店、1993、タンポポ・ハウスのできるまで、朝日新聞社、1999、建築探偵本を伐る、晶文社、2001、丹下健三、新建築社、2002、藤森照信建築、TOTO出版、2007、建築史的モンドイ、筑摩書房、2008、他
(建築作品)神長官守矢史料館、長野県、1991、タンポポ・ハウス、東京都、1995、熊本県立農業大学校学生寮、熊本県、2000、高過庵、長野県、2004、他
(展覧会)第10回ベネチアビエンナーレ日本館コミッション、2006年、同帰国展、2007、他

史料編纂所

加藤 友康 教授

(本学在職期間：昭和53年4月～平成22年3月)



昭和49年3月
本学文学部第2類(史学)卒業
昭和52年3月
本学大学院人文科学研究科国
史学専門課程修士課程修了
昭和63年4月
本学史料編纂所助教授
平成8年4月
本学史料編纂所教授

平成13年4月～平成15年3月
本学史料編纂所所長を併任
平成15年4月～平成17年3月
本学史料編纂所附属画像史料解析センター長を併任
平成21年4月～平成22年3月
本学史料編纂所所長を兼務

所属：古代史料部門

専門分野：日本古代史

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『古代文書論—正倉院文書と木簡・漆紙文書』(共編著、東京大学出版会)

『撰関政治と王朝文化』(編著、吉川弘文館)

『世界各国史1 日本史』(共著、山川出版社)

分子細胞生物学研究所

徳田 元 教授

(本学在職期間：昭和63年5月～平成22年3月)



昭和44年
名古屋大学農学部農芸化学科
卒業
昭和49年
名古屋大学大学院農学研究科
農芸化学専攻博士課程修了
昭和50年～54年
米国ロシユ分子生物学研究
所、イリノイ大学博士研究員

昭和54年4月 千葉大学助手

昭和63年5月 本学応用微生物研究所助教授

平成7年3月 本学分子細胞生物学研究所教授

平成19年4月～平成21年3月

本学アイソトープ総合センター長

所属：分子細胞生物学研究所 分子機能・形成部門

農学生命科学研究科応用生命工学専攻協力講座

専門分野：タンパク質の輸送・局在化機構

研究内容(代表的な著書や論文等)：

1. Nishiyama, K., Suzuki, T., and Tokuda, H. Inversion of the membrane topology of SecG coupled with SecA-dependent preprotein translocation. *Cell* 85, 71-81 (1996).
2. Yakushi, T., Masuda, K., Narita, S., Matsuyama, S., and Tokuda, H. A new ABC transporter mediating the detachment of lipid-modified proteins from membranes. *Nat. Cell Biol.* 2, 212-218 (2000).
3. Okuda, S., and Tokuda, H. Model of mouth-to-mouth transfer of bacterial lipoproteins through inner membrane LolC, periplasmic LolA, and outer membrane LolB. *Proc. Natl. Acad. Sci., USA*, 106, 5877-5882 (2009).

物性研究所

渡部 俊太郎 教授

(本学在職期間：昭和56年10月～平成22年3月)



昭和45年3月
本学工学部物理工学科卒業
昭和47年3月
本学大学院工学系研究科物理
工学専門課程修士課程修了
昭和50年3月
本学大学院工学系研究科物理
工学専門課程博士課程修了

昭和50年7月 工業技術院電子技術総合研究所研究職

昭和56年10月 本学物性研究所助教授

平成6年4月 本学物性研究所教授

平成16年4月～平成20年3月

本学物性研究所 副所長

所属：先端分光研究部門

専門分野：量子エレクトロニクス

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Nonlinear optics in the extreme ultraviolet, *Nature*, Vol. 432, No. 7017, 605-608, (2004)

Two-color phase control in tunneling ionization and harmonic generation by a strong laser field and its third harmonic., *Phys. Rev. Lett.* 73, 2692 (1994)

Coherent soft X-ray generation by harmonics of an ultra-high power KrF laser., *Phys. Rev. A* 43, 1669 (1991)

海洋研究所

窪川 かおる 教授

(本学在職期間：平成3年10月～平成22年3月)



昭和54年3月

早稲田大学教育学部卒業

昭和56年3月

早稲田大学大学院理工学研究科博士前期課程修了

昭和59年3月

早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程修了

平成3年10月 本学海洋研究所助手

平成16年9月

本学海洋研究所附属先端海洋システム研究センター教授

所属：

先端海洋システム研究センター海洋システム解析分野

専門分野：海洋生物学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

1. ナメクジウオ 頭索動物の生物学 安井金也・窪川かおる 東京大学出版会 2005年

2. Holland, L.Z., et al., (2008) The amphioxus genome illuminates vertebrate origins and cephalochordate biology. *Genome Research*, 18: 1100-1111.

宮崎 信之 教授

(本学在職期間：平成5年4月～平成22年3月)



昭和45年3月

京都大学農学部卒業

昭和47年3月

本学大学院農学系研究科修士課程修了

昭和50年3月

本学大学院農学系研究科博士課程修了

昭和51年5月 琉球大学理工学部助手

昭和53年5月 国立科学博物館動物研究部研究官

昭和58年7月 国立科学博物館動物研究部主任研究官

平成5年4月

本学海洋研究所附属大槌臨海研究センター教授

平成10年4月

本学海洋研究所附属大槌臨海研究センター長

平成15年4月

本学海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター教授

平成16年4月

本学海洋研究所附属海洋科学国際共同研究センター教授

所属：海洋科学国際共同研究センター企画情報分野

専門分野：海棲哺乳動物学、海洋環境学、バイオロギング・サイエンス

研究内容(代表的な著書や論文等)：

1. 海の哺乳類 1990 サイエンスエッセイ社 300 pp. (宮崎信之・粕谷俊雄)

2. 恐るべき海洋汚染 1992 合同出版 190 pp. (宮崎信之)

3. Nobuyuki Miyazaki, Zafar Adeel, and Kouichi Ohwada eds. *Mankind and the Oceans*. Tokyo: United Nations University Press, 2005.

11月17日(火)、2009一般公開講座が開催された。1991年に設立された気候システム研究センターも、2009年で満18歳を迎えた。この間、我が国の大学部局としては唯一、地球気候モデル開発と全球規模の気候研究を推進してきた。その思い出は感慨無量のものがある。その成果は、国内の多くの研究者と関係者によって利用・継承されており、当初の目的を十二分に果たしたと思われる。

このような研究を発展させ、さらに新しい地平を開拓するために、来年度からは海洋研究所と統合して、新たに大気海洋研究所としてスタートする。このような節目に当たって、今回の一般公開講座は「気候研究の20年—その黎明期から地球温暖化・環境変化の時代へ」と題し、これまでを振り返り、将来を語る場とさせていただいた。講師として、センター最年長の中島映至教授と高橋正明教授が昔話を、最年少の渡部雅浩准教授が若手からの提案を語ることにした。そのなかで、様々な方向へのモデルの発達、温暖化現象やオゾンホール現象などの諸現象の理解、観測とモデリングの緊密な協力などの成果が見えてきた。同時に、これらの強力な資産をどのように活かすかについても議論できたと思われる。会場からも、地球温暖化問題や環境問題に関する質問や意見、今後このような情報発信を続けてほしいなどの意見がでた。また、次世代スーパーコンピューターの開発ストップという事業仕分け結果については、多くの方々から懸念が寄せられた。今回も、非常にエキサイティングな時間を市民の方々と共有できたと思われる。

気候研究はやっと青年期を迎えた段階で、今後、気候の形成と変動のメカニズムに関する迫力のある研究成果や、予測精度の高いモデルと観測データ解析技術が次々と出てくると思われる。気候システム研究センターの一般公開講座としては、今回が最終回になるが、これからも新研究所から新しい情報の発信をしていきたいと思ひ、今後の発展を見守っていただければ幸いである。みなさまのご協力に感謝いたします。

下記ホームページにて、「時間内に回答できなかった当日寄せられた質問」に対する回答、次世代スーパーコンピューターに関する意見の集計等がご覧になれます。
http://www.ccsr.u-tokyo.ac.jp/what_is_new/kokai_koza2009/kokai_koza2009.htm



当日の会場内の様子



第一部講演の様子



第二部パネルディスカッションの様子

1月15日（金）、本学浅野キャンパス・武田ホールにおいて、ホロニック・エネルギーシステム学（東京ガス）寄付講座の主催により、第5回ホロニック・エネルギーシンポジウムが開催された。会場は機器メーカー、エネルギー事業者、大学、自治体、研究調査機関、建設会社など、産官学から広く196名の参加者が集い、関心の高さがうかがわれた。

今回は、「ホロニック・エネルギーシステムの学理と実践」を副題と掲げ、本学の松橋隆治教授による特別講演、金子成彦教授、幸田栄一特任准教授、坂東茂特任講師、電力中央研究所上席研究員浅野浩志氏、および東京ガス（株）徳本勉氏の講演があった。

松橋教授からは、IPCCなどで議論されているCO₂削減の世界の潮流や日本の取るべき対策についての講演があった。金子教授からは、寄付講座開設5年間の教育および研究活動の総括報告があった。幸田特任准教授からは、ホロニック・エネルギーシステムの学理の紹介と、学理に基づいた研究例として、分散電源によるアンシラリーサービスの供給、および広範囲な負荷率で高効率を保つ燃料電池発電システムに関する研究成果が紹介された。坂東特任講師からは、最適設計技術を用いたマイクログリッド構築の事業性検討について研究の成果が報告された。浅野氏からは、金融工学の手法を用いてエネルギー価格の不確実性を考慮した分散電源の投資戦略に関する研究成果が報告された。徳本氏からは、低炭素社会並びにホロニック・エネルギーシステムの実現に向けた東京ガスの長期的な取り組みと展望に加え、寄付講座開設期間の本学教員との共同研究の成果を踏まえて、ホロニック・エネルギーシステム実現へ向けた大学の役割について期待が述べられた。

最後に、本寄付講座運営委員長笠木伸英教授から、総括と低炭素社会実現への産学の力の結集を期待する挨拶が述べられ、シンポジウムは盛会のうちに閉会した。



第5回シンポジウムの会場の様子

1月21日（木）18時30分から、駒場Iキャンパス・コミュニケーションプラザ南館2階において、「平成21年度総合文化研究科長・教養学部長ならびに数理科学研究科長と外国人留学生との懇談会」が開催された。

この催しは、駒場Iキャンパスで学ぶ留学生と教職員とが一堂に会し、懇談を通じて、交流と相互理解を深めることを目的として毎年開かれているものである。当日は留学生、チューターや教職員あわせて150名と、昨年の120名を大幅に上回る参加者となった。

会は、後藤則行国際交流・留学生委員会委員長の開会の辞ではじまり、主催者である山影進総合文化研究科長・教養学部長と大島利雄数理科学研究科長の挨拶ののち、総合文化研究科の木村秀雄副研究科長の発声で乾杯、にぎやかな懇談がはじまった。

途中、教養学部4年のゴメス・メナンドロ・バヘトさん（ブラジル）、総合文化研究科修士1年のチョウ・ジンヘさん（韓国）のスピーチがあった。日本での生活で感じたこと、後輩へのアドバイス、研究科への要望などスピーチの内容は多岐にわたり、彼らが着実に勉学・研究をすすめているさまが窺えた。

今年も恒例の餅つきが行われ、多数の留学生が果敢に挑戦した。杵の振り方にもすぐに慣れて、またたく間に餅がつきあがり、その場でつくたての餅が振舞われた。

最後に、AIKOM生（今年度で15年目を迎えた本学部の短期交換留学制度により受入れている留学生）有志による合唱が披露され、学部生の初々しく希望に満ちた歌声に会場から大きな拍手が送られた。

会は盛況のうちに、総合文化研究科の嶋田正和副研究科長の閉会の辞をもって20時30分すぎに閉会した。



駒場Iキャンパス・懇談会集合写真



留学生によるスピーチ

大学院工学系研究科・工学部
第2回、第3回先進的工学教育講演会、SEL 成果発表会が連続開催される

工学教育推進機構（CIEE）では工学教育の先進的な試みを周知し、共に考えるために毎年3回の先進的工学教育講演会を主催している。今年度の第2回目としては、「創造的ものづくり・創造性工学プロジェクト合同発表会」が1月21日（木）に開催された。これは工学部共通科目「創造的ものづくりプロジェクトⅡ」および大学院共通科目「創造性工学プロジェクトⅡ」の下で開講した複数の異なる視野・テーマを分野と学年を越えて活動するサブプロジェクトについて、その進捗・成果を学内外に報告し体験を共有する機会として合同発表会を行なったものである。フォーミュラプロジェクト、フライトシミュレータプロジェクト、工学理解促進プロジェクト、国際活動体験プロジェクト、E-learning システム構築プロジェクトが一学期間の成果を発表した。

この中で、工学理解促進プロジェクトは科学技術コミュニケーション能力を高めるために小学生に科学技術の特別授業を行うもので、大学発教育支援コンソーシアム推進機構（COREF）との連携で開始されたものである。また、国際活動体験プロジェクトは、シスコシステムズとの連携でネットワークを用いた国際体験と国際コミュニケーション能力強化を目的に、また E-learning システム構築プロジェクトは WEB を用いた英語自主学習システムの開発を目指すもので、両者は国際力強化を目的に新設された。

2月2日（火）には、情報学環・福武ホールにおいて「グローバル化の中での多様性」と題した第3回先進的工学教育講演会が開かれた。日本ではまだなじみの少ないダイバーシティ（多様性）という言葉について、本学理事江川雅子氏による「グローバル時代の大学における多様

性」と題した基調講演、米シスコシステムズ社ダイバーシティ担当重役 Marsha Gewirtzman 氏による「ダイバーシティの取り組みとその必要性」と題した招待講演が行われ、学内外からの聴衆が熱心に聴講した。その後、こういった講演会としては珍しく、老若男女の聴衆が5、6人ずつのグループに分かれてダイバーシティについてのディスカッションを行い、互いに意見を交わした。参加者それぞれによって異なる認識そのものがダイバーシティであり、異なった背景を持つ者が共に考えるよい機会となった。次に、このディスカッションの内容に基づいてパネリストとの質疑応答があり、グループディスカッションの内容が聴衆全体に共有され、一体感を味わうことができた。最後に保立和夫研究科長よりの閉会の辞では締めくくられた。

日には前後するが、1月29日（金）には、工学教育推進機構が主催する複数の英語学校との連携事業、SEL（スペシャル・イングリッシュ・レッスン）の成果発表会が開催された。各クラスの趣向を凝らした発表形式で日頃の学習成果が披露された。なお、SEL は平成22年度からは本郷キャンパス全体で展開される予定である。詳細は機構 HP (<http://ciee.t.u-tokyo.ac.jp/>) にて公開予定。



成果を発表する学生たち（1月21日）



質問に答える講演者（2月2日）中央に江川理事



SELの留学生TAが勢ぞろい（1月29日）

大学院教育学研究科・教育学部

第一回バリアフリー教育開発研究会
議開催

1月22日（金）、第1回バリアフリー教育開発研究会が開かれた。本会議では、バリアフリー教育開発センター長をはじめとする運営委員と、研究員、協力研究員の11名と、オブザーバー、関係者6名が出席した。

白石さや教授（副センター長）の司会のもと、まず、武藤芳照教育学研究科長よりバリアフリー教育開発研究センター専任講師となられた星加良司先生のご紹介、「バリアフリー教育」のロゴタイプやシンボルキャラクターの決定、またセンターの国際交流、全学での位置づけや東京大学の行動シナリオにバリアフリー教育が組み入れられる等、センターの今年度の展開や今後につながる事が紹介された。次に、運営委員の紹介の後、出席された研究員の金生由紀子さん、勝亦あきこさん、協力研究員のパラリンピック金メダリストの河合純一さんのご紹介が行われた。

そして、衛藤隆教授（センター長）よりバリアフリー教育開発研究センターの本年度の活動報告がなされた。本年度はセンター開設初年度ということもあり、ホームページ開設やロゴタイプ・シンボルキャラクターの作成など、研究環境整備やセンターを広く知ってもらう活動と同時に、センター開設記念・市民公開フォーラムの開催、科学研究費申請のための研究内容の決定が行われたことが報告された。また今後の活動計画として運営委員会の開催、本研究センター年報の刊行が述べられた。

休憩をはさんで、会議出席者による意見交換が行われた。福島智教授（先端科学技術研究センター）より全学的に認知されることの意味や位置づけの変化による機能の変化について質問があり、衛藤教授より教育学研究科の附属という正式な位置づけになっただけで、機能としては変わらないと答えられた。次に、星加講師より科学研究費申請の研究について詳しく説明が行われた。この中で星加講師は高等教育におけるバリアフリー教育を強

調し、障害について、特定の観点に限らず総合的な観点で、学生の思考や発想に影響を与えていく方法を模索できるとよいと述べられた。

また、河合氏より、発達段階に応じた教育内容の精選や事前事後の教員の指導の必要性を、ご自身の講演等の経験から述べられた。勝亦氏も、発達段階に応じたコンテンツの提供の必要性に同意され、教員の影響の問題も述べられた。福島教授は、これまでにどのような実践が行われているか情報収集とその整理が必要であり、その上で、本学としてこういったタイプのバリアフリー教育が出来るか、または新しい手法や試みを作っていくかという3段階を示された。これに対し、星加講師がこの問題に関し筑波大学で系統的な調査研究が行われているが、教員側の実質的な調査が難しい旨を述べられ、教員が持つ「構え」の問題にどの程度踏み込めるか、その可能性を問題にあげられた。下山晴彦教授（センター運営委員）からも発達障害の問題があげられ、支援の方向性はあるものの「構え」の問題でうまくいっていないことが述べられた。勝亦氏も、教員が理解のためだけに取り組んでも、自分の考えを否定する段階を踏む必要性が「構え」につながると述べられ、実際に障害児との関わりがスムーズな理解につながる道だと示された。

尚、障害を示す言葉として『障碍』『障がい』という表記もあり、それぞれの表記を用いる上での背景、考え方等について複数の見解が示された。

会議終了後、山上会館に場所を移して情報交換会が行われ、出席者の親睦が深められた。情報交換会でも、盛んに今後の研究の方向性などが話し合われ、盛況の内に本研究会議は幕を閉じた。



意見交換をする様子



活動報告をする衛藤教授（センター長）



研究会議の様子

大学院教育学研究科・教育学部

留学生懇談会を開催

部局

1月27日（水）17時30分から山上会館において、教育学部・教育学研究科留学生懇談会を開催した。

留学生懇談会は、春と秋の年2回、留学生と教職員が親睦を深め、また、新入留学生を歓迎することを目的として開催している。今回は、留学生22名、附属中等教育学校副校長を含む教職員30名、チューターの日本人学生12名が参加し、武藤芳照研究科長の挨拶に続き、白石さや国際交流委員会委員長・教授の乾杯の発声により始まった。

懇談後の新入留学生の紹介・挨拶では、来日して感じたことや今後の抱負など、それぞれの思いが留学生から熱く語られた。また、毎回恒例の留学生による出し物では、大学経営・政策コース・大学院外国人研究生の楊 瞳（ヨウ ドウ）さんによる中国の楽器・葫芦丝（hu lu si）の演奏、教育内容開発コース・博士課程2年の鄭 允貞（ジョン ユンジョン）さんによる韓国舞踊が披露された。

葫芦丝は、中国の雲南省、特に、少数民族のタイ族、ブーラン族の間で愛用されている瓢箪で出来た楽器で、その

やさしく繊細な音色に参加者一同が聴き入り、心を癒される一時となった。また、韓国舞踊では、美しい衣装に包まれ、時に軽快に、時に艶やかに舞う姿に、一同は時を忘れて見入り、多彩な文化に触れる絶好の機会となった。

その後も終始和やかな雰囲気では続き、教員や留学生の所属コースを超えた交流の場となった懇談会は、市川伸一副研究科長の挨拶により盛況のうちに閉会した。



新入学の留学生として挨拶するダワード・モハンマドさん



（左）中国の楽器・葫芦丝（hu lu si）の説明をする楊 瞳さん
（右）艶やかに韓国舞踊を舞う鄭 允貞さん

生産技術研究所

「第7回東京大学学生発明コンテスト」表彰式行われる！

部局

生産技術研究所、産学連携本部、(財)生産技術研究奨励会との共催で行われている本コンテストも、今年で第7回を数えた。学生が発明や知的財産権に対する理解を深めることを目的に始まった本コンテストは、工学系、理学系の大学院生を中心に広く学内から毎年二十数件の応募があり、これまでに数々の優秀作品が特許申請に至っている。今年度はエントリーシステムの導入により応募の敷居が下がったこと、一般部門に加えて課題部門「学生生活を快適にする発明」が設定されたことなど新

たな試みもあって応募者が増え、書類選考倍率が2倍超という激戦だった。12月22日(火)に行われたプレゼンテーション審査では、事前に送付された従来技術調査結果を前に、試作品の披露など工夫を凝らしたディフェンスが行われた。甲乙つけがたい中で、四津有人さん(医学系研究科・外科学専攻博士2年)の発明は医療現場の切実な要望から生まれたアイデアが評価され、見事発明大賞の受賞となった。四津さんは受賞の感想の中で「日々の忙しさで、発想や工夫を思いついてもなかなかそれを具現化する機会がありません。このコンテストの存在意義は大変大きいと思います」と語り、異分野間連携の重要性を強調した。

他に生産技術研究所長賞、産学連携本部長賞、アイデア賞(各1件)、奨励賞(4件)が授与された。細谷勇斗さん(情報学環・教育部1年)は課題部門への応募で、学生生活の快適さと環境配慮を両立させる詳細なビジネスモデルを提案したことが評価され、生産技術研究所長賞の受賞となった。竹内惇さん(工学系研究科・物理学専攻修士2年)は、実験中に見出した予期せぬ現象を突き詰め、さまざまな分野に応用可能な普遍的技術の種を確立したことが評価され、産学連携本部長賞を受賞した。手島哲彦さん(総合文化研究科・広域科学専攻修士1年)は日頃の研究活動に関連した発明でアイデア賞を、また倉員智瑛さん(総合文化研究科・広域科学専攻修士1年)、山浦博志さん(工学系研究科・精密機械工学専攻修士2年)、高橋祐樹さん(工学系研究科・建築学専攻博士1年)、作村守央さん(新領域創成科学研究科・先端エネルギー工学専攻修士1年)は、日々の研究や日常生活の中で生まれたひらめきを具体化することで審査員に強くアピールし、それぞれ奨励賞を受賞した。

受賞者は1月27日(水)に行われた表彰式で喜びを新たにし、それぞれ発明に至った経緯や知的財産に対する思いなどを語ってくれた。今回のコンテストでは研究に深く関連した発明ばかりでなく、日用雑貨などの身近な品に関するアイデアが増えたことも特徴だと言える。本コンテストを通じて、「些細なアイデアでも特許に結びつくことがある」ということを実感した参加者も多い。来年度以降も学生への積極的な参加を呼び掛け、知的財産に関心をもってもらえるよう趣向を凝らした企画をしたい。

上位3賞に豪華副賞をご提供頂いた(株)ニコン様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。本コンテストの詳細は、発明コンテストのホームページ(<http://hatsumeii.is.u-tokyo.ac.jp/>)に掲載されています。

	生産技術研究所
	モビリティ・フィールドサイエンス(タカラトミー) 寄付研究部門設立お披露目および、準静電界の技術シンポジウム開催

1月29日(金)、駒場リサーチキャンパス・コンベンションホールにて、生産技術研究所モビリティ・フィールドサイエンス(タカラトミー) 寄付研究部門設立のお披露目および準静電界の技術シンポジウムが開催された。本寄付研究部門は2009年4月に株式会社タカラトミーの寄附を受けて設立された。これまでの活動により、すでに幅広い分野の産業界からの注目を集め、新技術としての展開が期待されていることから、今回の開催に至った。

当日は、生産技術研究所・野城智也所長、本学・松本洋一郎理事(副学長)、本部門の特任教授を兼務している生産技術研究所・須田義大教授による部門設立の挨拶を皮切りに、株式会社タカラトミーの佐藤慶太副社長並びに株式会社村田製作所の中島規巨通信モジュール商品事業部長から、この技術への期待をテーマとした招待講演が行われ、任天堂株式会社の岩田聡社長からの祝電が読み上げられた。引き続き、本所の橋本秀紀准教授から空間知能化への準静電界技術の応用、続いて準静電界技術の提唱者でもある本部門の滝口清昭特任准教授による基調講演が行われた。シンポジウムの最後には、クオインタムリープ株式会社代表取締役の出井伸之氏(元ソニー会長)による特別講演が行われ、我が国独自技術である準静電界技術をいかに発展させていくべきか、産業界の役割と大学に対する強い期待が語られた。

懇親会においては、本学産学連携本部長の影山和郎教授からの祝辞を頂き、産学官からお招きした多くの参加者を交えた技術交流が行われ、本研究部門の今後の活動に対する期待の高さが示されたように思う。



松本洋一郎理事(副学長)による開会挨拶



クオインタムリーブ(株)出井伸之氏による特別講演

部局

史料編纂所

「研究と情報の資源化」シンポジウム
を開催

1月30日(土)、史料編纂所(加藤友康所長)では、「研究と情報の資源化—史料編纂所大型プロジェクトの進捗—」シンポジウムを開催し(於山上会館)、全国から160名を超える歴史学や情報学の専門研究者が参加した。

当日の報告テーマは以下のものである。第一報告「科学研究費基盤研究(S)『史料デジタル収集の体系化に基づく歴史オントロジー構築の研究』(林譲教授)／第二報告「科学研究費学術創成研究『目録学の構築と古典学の再生』(田島公教授)／第三報告「在外日本関係史料収集事業プロジェクト」(保谷徹教授)／第四報告「画像史料解析センターのプロジェクト研究」(高橋敏子准教授)／第五報告「前近代日本史情報国際センター—実績と将来—」(石川徹也特任教授・加藤友康所長)

第一報告では、史料編纂所がマイクロフィルムで収集した国内史料370万コマのデジタル化に取り組み、この膨大なデータをサーバ(アーカイヴハブ)に格納し、メタデータを付与して検索・閲覧するシステムの開発、さらに人物情報や地理情報を付加して相互参照し、歴史知識として引き出すことができる検索モジュールの開発など、歴史オントロジー構築の現状が報告された。サブ報告として、金子拓助教から「秋田藩家蔵文書」のデータベース化と地域連携の試みについて報告があり、時系列的に諸史料が引き出されてくるオントロジー検索のシミュレーションを披露して、会場をわかせた。

第二報告は、天皇家・公家文庫の収蔵史料をデジタル化し、目録情報と画像データを結びつける独自の目録学構築、伝統的知識体系の復元的研究について報告した。またその具体例として、遠藤基郎准教授が東南院文書(宮内庁正倉院事務所所管)のデジタル化とTKビュー開発について報告した。

第三報告は、史料編纂所の在外史料調査の歴史と収集した史料群、とくに近年の中国・ロシアにおける系統的

な史料収集について報告し、日本学士院を通じ、国際学士院連合・ユネスコ等の協力で収集した在外日本関係史料(約130万コマ)のデジタル化研究について課題と展望が示された。

第四報告では、絵画や絵図・地図・古写真などの画像史料に関するプロジェクト研究が紹介され、サブ報告として、電子くずし字字典データベースの開発と奈良文化財研究所との連携(井上聡助教)、現地鳥取県での社会教育・学校教育への活用が話題になった『東郷荘総合情報システム』(DVD版)の開発の試み(西田友広助教)が紹介された。

第五報告では前近代日本史情報国際センターの活動を総括し、課題とした歴史知識学研究について、日本学士院編『明治前日本科学史』のデータベース化・検索システムの開発、難読文字を自動推薦する翻刻支援機能の研究、昇進データを可視化する歴史知識可視化研究などの実績が報告された。最後に加藤所長から、史料編纂所が「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」として認定され、次年度から新たに出発する前近代日本史情報国際センターは、この共同利用・共同拠点研究を支える基盤システム構築を課題としていくことが表明された。

報告終了後、パネルディスカッションに移り、明星聖子准教授(埼玉大学)により、自らのカフカ研究を通じた編集文献学の立場からコメントがあった。その後、報告者、会場からの意見表明も続き、歴史学と情報学それぞれの立場から熱心な議論がおこなわれた。



満員のシンポジウム会場(山上会館)



パネルディスカッションの様子



イノベーション政策研究会第1回
ワークショップ「イノベーション政策学を考える」を開催

2月4日（木）、大学院工学系研究科・工学部総合研究機構 イノベーション政策研究センター主催の「イノベーション政策研究会第1回ワークショップ『イノベーション政策学を考える』」が開催された。講演の部では、藤末健三先生（早稲田大学客員教授、参議院議員）による特別講演、JST-CRDS・岡本麻子フェローらによる基調講演が行われた。グループディスカッションの部では約60名の参加者が活発な議論を行った。



ワークショップの様子

このワークショップは、日本におけるイノベーション政策学の在り方を議論する場として、官学の関係者間でイノベーション政策学という概念を共有する目的で開催された。経済産業省、文部科学省、新エネルギー・産業総合開発機構（NEDO）、科学技術振興機構（JST）、科学技術政策研究所（NISTEP）など、多岐に渡る機関から参加があり、終始熱気を帯びた講演、ディスカッションが続いた。

講演の部では、まず本学の坂田一郎教授からイントロダクションとして、イノベーション政策学の重要性に関する講演が行われた。次に、藤末健三客員教授から、政治からのイノベーション政策学への期待とニーズについての特別講演が行われた。イノベーションに関する世界の現状を体系化し、日本の課題を指摘した上で、政治の現場からの視点で、今後重要になる政策の大転換は本来優れたシンクタンク機能が必要で、専門的知識を有する大学こそこの機能を担うべきであると熱弁した。



藤末健三先生による特別講演

グループディスカッションの部では、全参加者が（1）研究、（2）人材育成、（3）連携のグループに分かれ、1時間ほどの白熱した議論が展開された。グループディスカッションの後には各グループから議論の報告があり、参加者の積極的な協力のもと、イノベーション政策学の認識共有と研究者ネットワークの形成という目的を達成することができ、盛会のうちに幕を閉じた。



グループディスカッションの様子

参加者からは「色々な観点からイノベーション政策学で活躍している方の講演を聞き、勉強になった」「異なるバックグラウンドの方々と議論ができ、有意義だった」というような満足の声が上がっており、今後も継続的に同ワークショップや各論の議論を行う若手政策セミナーを開催する予定である。



公開講演会「LHC 実験はじまる」開催される

2月11日（木・祝）に、公開講演会「LHC 実験はじまる」を安田講堂で開催した。当日は午後から雨が降り出し、東京の最高気温は6度という真冬日の中、870名を超える参加者があり、終了後も長時間、多数の参加者が残って質問などをする盛会となった。

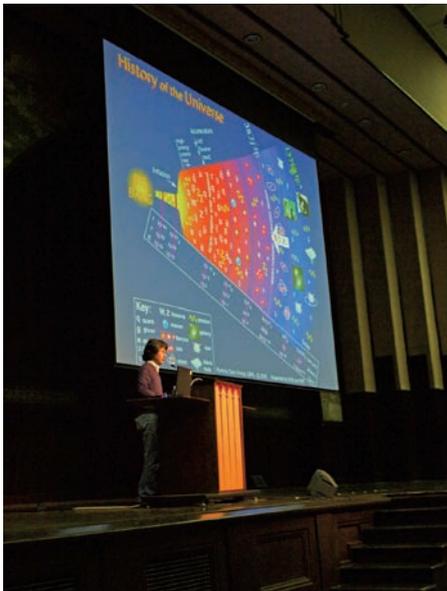
講演に先立ち、2002年にノーベル物理学賞を受賞さ

れた小柴昌俊特別栄誉教授より「LHC 実験が再稼働したことはめでたいことだが、これからが苦労のはじまりだ」との激励の挨拶をいただいた後、小林富雄教授（素粒子物理国際研究センター）と村山斉数物連携宇宙研究機構長による、以下の講演があった。

小林富雄「LHC 実験が切り拓くテラスケールの世界」
村山 斉「LHC 実験から宇宙へ」

小林教授はアトラス日本共同代表者の一人であり、今回の講演会では LHC 実験の概要と最新の実験状況を誰でも理解できるようにと写真や図解を多く取り入れ、LHC 実験の期待される研究成果について講演した。特に我々に世界に陰の世界がある可能性や 4 次元以外の次元がある可能性などこれまでの常識を超える新しい世界観が切り拓かれる可能性について熱く語った。

村山機構長は宇宙の起源と LHC 実験がもたらす宇宙の未来について時折ユーモアのある図や写真を使い、魅力的な語り口で聴講者を惹きつけ会場を沸かせた。

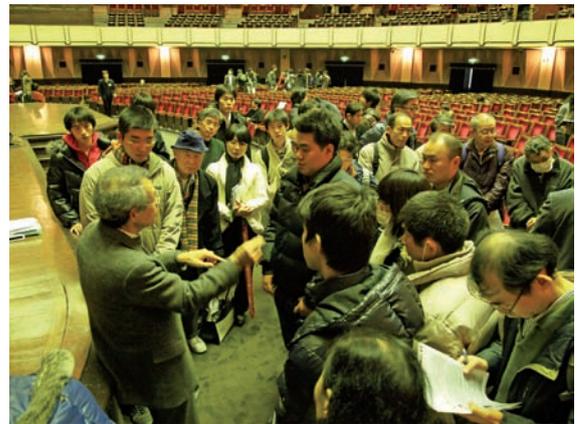


村山機構長の講演



講演会の様子

講演終了後も聴講者からの熱心な質問が絶えず、小林教授の周りには多くの人だかりが出来たため、急遽、素粒子物理国際研究センター教員が質問に対応することになった。



聴講者の質問に答える小林教授

参加者の半数以上から回収されたアンケートには「LHC 実験の結果報告の講演会を開催してほしい」「講演時間が足りなかった」「質疑応答の時間ももっとほしい」といった意見や感想を多数いただき、LHC 実験の期待や宇宙や素粒子への関心の高さを窺うことができた。

大学院総合文化研究科・教養学部



三鷹国際学生宿舎生、三鷹市民駅伝大会を快走

2月14日(日)に行われた第18回三鷹市民駅伝大会に、東京大学三鷹国際学生宿舎から2チームが参加した。昨年の初出場に引き続き、今年も留学生を主体とした留学生チーム、日本人学部生・院生から成る日本人チームが出場した。当日は好天に恵まれ、絶好の駅伝日和となった。

三鷹市民駅伝大会は、毎年抽選で選ばれた200チーム、各4名のランナーが三鷹市内一周13.3kmを走るものである。今年は揃いの淡青カラーの“東京大学”ユニフォームを身にまとい市内を快走した。

留学生にとっては初めて見る襷であったが、市民と共に市内を走る楽しさを感じながら、日本の伝統文化を肌で感じる絶好の機会となった。アメリカから来たウィルソン コリン (Wilson Colin) さんが1区を務め、カナダからきたチュウ イーシャ (Choo Yisha) さん、シンガポールのアルデン ライ ユアンホン (Alden Lai Yuanhong) さん、月崎 竜童さんらで1時間1分59秒 (125/200位)で見事襷をつないだ。一方の日本人チームは1区の学部1年生の町田 英紀さんが好走するものの、普段は研究に没頭する院生ら (堤 裕策さん、檜崎 弘二さん、木村 太郎さん) の運動不足がたたりに、1時間4分12秒 (141/200位) となった。



日本文化である襷リレーを初めて体験

三鷹国際学生宿舎では、170名の留学生、30名の日本人院生チューター、400名の日本人学部生が生活を送っており、歓送迎パーティーや季節行事、日常生活などを通して活発な国際交流を行っている。今回の市民駅伝大会は、日本人学生・留学生が襷をつないでだけでなく、なかなか交流の機会が持てない地元市民との親睦を深める意味でも、非常に有意義な参加となった。



先輩から後輩へつながれる襷



お疲れ様でした！

分子細胞生物学研究所
分子細胞生物学研究所で留学生と教職員との懇談会を開催

2月18日（木）17時30分より、IML棟3階会議室において、平成21年度分子細胞生物学研究所留学生と教職員との懇談会が開催された。

分子細胞生物学研究所には現在、中国、台湾、韓国、インド、オランダ、スウェーデンから総勢16名の留学生（外国人研究者を含む）が在籍し、活発な研究活動を行っている。分子細胞生物学研究所は本館、総合研究棟、生命科学総合研究棟、IML棟に分散して研究を行っているため普段接する機会が少ないことがあり、留学生と教職員の懇親を目的に例年開催されている。今回は総勢約41名の参加があった。

懇談会は世話役でもある横田明准教授の開会の挨拶で開始され、乾杯の後、和やかに歓談が始まった。各研究分野に所属する留学生よりスピーチがあり、立派な日本語を披露してくれて、会場はおおいに盛り上がった。



にぎやかな歓談の後、記念撮影



留学生、外国人研究員によるスピーチ

留学生センター

留学生センター「集中日本語コース・学術日本語コース」及び「日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム」2009年度冬学期修了証書授与式が行われる

留学生センターの標記の日本語コースの2009年度冬学期修了証書授与式が、2月19日（金）16時15分から、赤門総合研究棟2階200講義室で行われた。

各コースとも昨年10月に開講し、「集中日本語コース」は初級から上級まで5つのクラスに分かれて、また、アカデミックジャパニーズの習得をめざす上級者用「学術日本語コース」は2つのクラスに分かれて日本語の学習を続け、合計56名が所定の課程を修了した。また、今年度は、昨年度まで別に行っていた「日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム」の修了証書授与式（修了者4名）もあわせて行われた。



集合写真

式には、国際担当理事の田中明彦理事（副学長）、嶋田一夫総長補佐、「日韓」プログラムの工学部側の責任者をつとめられた相田仁教授らが来賓として出席されたほか、修了者と、センターの関係教職員らが出席した。式では、まず、坂野仁留学生センター長から修了者一人ひとりに修了証書が手渡された後、来賓の田中理事（副学長）から、わかりやすい日本語で、修了をねぎらい、留学生たちの日本語の上達を祝福する祝辞が述べられた。続いて、日本語教育部門主任の菊地康人教授から、クラス別の講評が述べられた。

最後に、修了者を代表して、2名の留学生からのスピーチがあった。マット・ジョーンズさん（イギリス・集中日本語コース代表）からは、ほとんど日本語を知らずに渡日した留學生活の困難さをセンターでの日本語学習を経て明るく乗り越えていった様子が、また、ママディアン・エリオノールさん（フランス・学術日本語コース代表）からは、「コースの内容は上級者の自分にも改めて日本語の難しさを意識させられるものであったが、あきらめずに日本語での論文執筆に挑戦したい」との決意が、それぞれ、ユーモアをこめて流暢に述べられ、和やかな

雰囲気の中に式は終了した。

式終了後、引き続き、山上会館にところを移して懇談会が行われた。懇談会にも出席された田中理事（副学長）と相田教授からは、それぞれ、ご自身の指導された留学生（センター日本語コースの修了者）について触れながら、せっかく学んだ日本語を引き続き上達させてほしいと留学生たちを励ますメッセージが送られた。

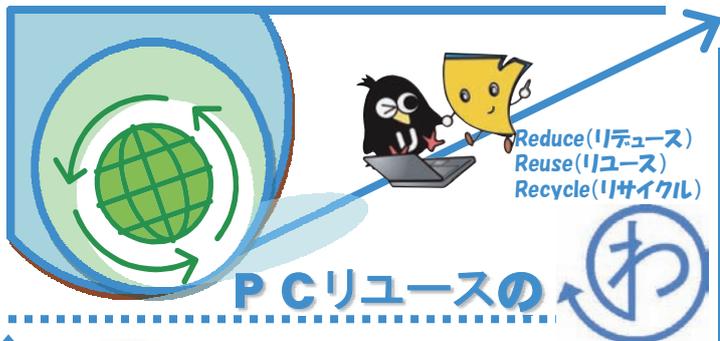
懇談会では、各クラス代表のスピーチを織りまぜながら、修了者たちは歓談し、教員を囲んで記念撮影をしたり、日本の歌を歌ったりして、楽しい時を過ごし、別れを惜しみつつ閉会となった。



スピーチに聞き入る修了生



修了証の授与



第⑤回 ソフトウェアのはなし

学生さんにレンタルするリユースPCにはOS(Windows XP)、アプリケーションソフト(以下「アプリ」)、セキュリティソフトがインストールされ、受け取ったらすぐに使える状態で渡しています。実は、企画時に、データ消去後のPCの設定について、先生方から、①初期設定なし、②無償OSのみインストール、③Windowsをインストール、と3つの案があげられていました。そこで、私たちスタッフは、秋葉原の中古PCショップに出かけ「私はPCに全く詳しくないのですが、空っぽのPCを受け取った時、果たして使える状態にできるでしょうか」と質問をしたところ、難しい専門用語を並べられ、「お客様、それは大変危険です」と断固反対をされました。

またその頃、文系学生さんを対象にしたアンケートで「せめてWord、Excel、PowerPointは入れてほしい」との意見が多数見受けられ、OSだけではなくアプリの必要性も出てきました。そこでネックになったのが、予算です。OSはリカバリーCDがあれば費用はかかりませんが、アプリはそうはいきません。誰もが知っているMicrosoft Officeはアカデミック価格でも2万円弱もし、委託業者さんの作業代金も含めれば、1台再生するのに、お店で売っている中古PCくらいの費用がかかります。頭を抱えた私たちに中古PC業者さんが、そっと教えてくれたのが、Kingsoft Officeという中国で開発されたソフトでした。

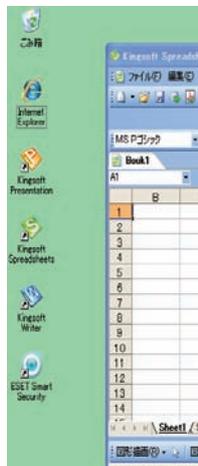
Microsoft Officeにそっくりな機能と、高いファイル互換性が特徴です。

心配な著作権や知的所有権もクリアしており、何より気になるお値段は、なんと980円という破格の安さ！

モニターの子供さんからも「使いやすい」と感想をもらいました。

セキュリティソフトも情報基盤センターからのご提供という本当に本当にありがたいお話をいただき、なんとか目標予算内で再生できたのです。

リユースPCはすでに100台近く利用され、この3月で卒業する学生さんからはPCが返却されました。無事に役割を果たせたと、ほっと一安心です。(青)



見た目もそっくり！

★2月各部署ご提供PC★

理学部 9台 情報基盤センター 2台 教育学部 1台 農学部 1台
 以上13台のノートPCは3回目の募集に利用させていただきます。
 どうもありがとうございました。引き続きよろしくお願いたします。

- 問い合わせ先：ノートPCリユースオフィス (本部資産経営G内)
 E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp
 URL : http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/
 内線: 22135 (担当 青木・高橋)
- ノートPC回収先：美津野商事株式会社システム事業部
 E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)
 電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

インタープリターズ・バイブル vol. 32



科学技術振興調整費新興分野人材育成 科学技術インタープリター養成プログラム

ブタペスト宣言から10年

黒田玲子

総合文化研究科 教授

科学技術インタープリター養成プログラム代表

(ICS副会長)

1999年6月末、21世紀を目前に、世界中の研究・教育機関、学界、産業界、政府機関、マスコミなどの代表者がドナウ河に面した美しい町ブダペスト(ハンガリーの首都)に集まり、世界科学会議(WCS)が開催された。ICSU(国際科学会議)とユネスコの共催によるもので、科学が直面している様々な問題についてその理解を深め、戦略的な行動について討議し、最終日の7月1日には「科学と科学的知識の利用に関する世界宣言」(http://www.unesco.org/science/wcs/eng/declaration_e.htm)を採択した。「我々のすべては同じ惑星に住み、我々のすべてはその生物圏の一部である。我々が相互依存性の高まりの中におかれているということ、そして、我々の未来は、全地球的な生命維持システムの保全と、あらゆる形態の生命の存続とに不可避的に結びついているということが認識されるにいたっている。」ではじまる格調高い前文に続き、科学の使命として、4つが掲げられた。これまで科学は1.知識のための科学：進歩のための知識 2.平和のための科学、3.開発のための科学という位置づけであったが、それに加え、4.社会における科学と社会のための科学が加わり、このため、この宣言は歴史的なものになった。

昨年11月、ブダペスト宣言10周年を記念して、世界科学フォーラム(WSF)が「知識と未来」をテーマに、ハンガリー科学アカデミー、ユネスコ、ICSUの共催により再びブダペストで開催され、科学者、各国政府関係者、国際機関関係者、ジャーナリスト、非政府組織など92カ国から約800名が参加した。過去10年の解析、未来展望、科学と生態系サービス、科学外交、研究資金、科学と女性、科学と若者、サイエンスコミュニケーションなど幅広く議論された。

確かにこの10年間で、科学技術は一層進展し、その結果、社会構造も大きく変化した。インターネット、携帯電話により、誰でも即座に世界とつながり、情報を受信・発信できるようになった。ライフサイエンス、バイオテクノロジーの進展もめざましく、医療・農業などに応用されつつある。このように、科学は社会の中によりいっそう浸透し、科学を好きか嫌いかなどと言っていられなくなった。

1996年から提唱してきた「社会と科学の双方向性の架け橋としてのインタープリター」の重要性はいっそう増していることを、99年と昨年のブダペストでの会議に参加して再確認した。2005年に科学技術振興調整費の支援を受けて始まった科学技術インタープリター養成プログラムは5年の期間を終え、いったん終了する。しかし私たちは、このプログラムを正規のカリキュラムとして定着させ、大学院生対象のコースのほか、教養学部の3、4年生などにも広げていく所存で、現在、準備を進めている。より多くの皆様の参画とご支援をお願いします。

※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況など共にご紹介していきます。

Activity report

活動報告

愛媛県新居浜市 在宅医療・介護に関する訪問調査を通じて

当センターでは、超高齢化社会の中で、高齢者が安心して生活できる環境・制度を構築するための研究に取り組んでいます。今回、高齢者への医療・福祉領域、特に在宅での高齢者への医療・介護について考えるために、愛媛県新居浜市の新居浜医療生活協同組合（以下、新居浜医療生協）を訪問しました。

新居浜医療生協の特徴

新居浜医療生協は、地域に根付いた住民参加型の医療・福祉体制を目指して、診療所を中核に、在宅での医療・介護の提供や高齢者向けのシェアハウスの提供を行い、医療と介護を横断したサービスを行っています。現在、保険制度上では、医療と介護は分離しており、通常は別の機関がそれぞれ医療と介護を担当しています。新居浜では、医療生協が両方の施設を保持することで、医療と介護のサービスをつなげ、一体化させています。このことによって、医療側の情報はスムーズに介護側に伝わり、患者の健康状態にふさわしい介護を行うことが出来、また、逆に介護側から情報が伝わることで、自宅にいても医療側は患者の健康状態を把握したり、予防的処置を試みたりすることが可能となっています。医療・介護間、そして医療生協と地域との間に、緊密な連携を築くことで、高齢者の方が求めている医療・介護を、必要なタイミングで提供することを目指しています。住み慣れた自宅での終末期医療を希望する方には、在宅での看取りを行い、高齢者の生活の質の向上に取り組んでいます。

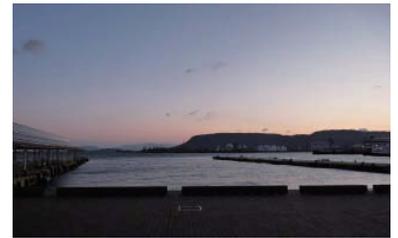


高齢社会におけるまちづくり・働き方

新居浜医療生協は、これらの医療・介護分野での特徴に加えて、高齢社会におけるまちづくりや働き方についても、独自の考え方を持っています。高齢者向け・認知症患者対応型のシェアハウスを設置し、高齢者が共同生活を行う環境を作り出す、あるいは定年制度を廃止し、柔軟性の高い労働環境を作ることで、70代であっても現役で仕事ができる環境を整備するなど、これまでとは異なるまちづくり、働き方のあり方を示しています。高齢者が若者に依存せずに、安心して生活できる環境作りを、まちづくりの面からもサポートしています。

現場を踏まえた制度構築のために

高齢者が安心して、いきいきと生活できる社会を作っていくために、新居浜で行われていることは参考になるモデルケースだと考えられます。そうは言っても、現状の制度の枠組みとは異なる運営方法を取っているため、新居浜医療生協でもいろいろな困難に直面することがあるようです。それは、財政的な問題であったり、制度的な問題であったりしますが、その都度現場の努力と工夫で乗り越えてきたようです。政策ビジョン研究センターでは、こういった現場の声を聞きながら、高齢者の安全・安心を担保する地域医療・介護の制度作りに向けて、また良い医療・介護サービスのサステナビリティを作り出すために研究を進めていきたいと思っています。



高松港より、瀬戸内海の朝。



在宅医療・介護の現場（愛媛県新居浜市）

ちょっと一言

政策ビジョン研究センターのホームページでは、イベント情報や研究成果、メディア情報に加え、新しいコーナーが続々と誕生しています。いずれも、「今、身の回りで起こっている変化を、できるだけリアルタイムで、みなさまにお伝えしたい。」ということで、まだはっきりとした成果の形にはなっていないものでも、ご紹介しようという試みです。たとえば、論文コーナーに加えた、Working Paper のページや、イベントコーナーに入れた活動報告のページなどがこれに該当します。

なお、このホームページでは、現在進行形のできごとや個人的な見解などは発表しにくいので、もっと自由に書けるサイトを別途作ることも計画しています。ご期待ください。

Pick up a word

政策関連用語集 技術ガバナンス関連用語より

ロックイン
Lock-in

一定の技術を社会が選択した場合、その技術がその後の社会の選択を規定するという現象を指す。仮に、より優れた技術が登場したとしても、既存の技術が広く広まっているが故に優位を続ける。ロックインは、制度的、政治的に担保されることもある。

<http://pari.u-tokyo.ac.jp/unit/words.html>

このちょっと、音楽がバーカウンターを思わせるような響きを持つ用語「ロックイン」。技術ガバナンス研究ユニットより紹介された、政策関連用語です。意味を調べてみると、最初のゆるいイメージとはほとんど真逆の、固定化に関する内容でした。

ある技術が社会に受け入れられるためには、様々な条件が必要となりますが、ここでは、技術そのものの優劣よりも、どっちが先か後かという順番が重

要であり、先に入った技術によって後の技術の参入が防がれる、要は早い者勝ちになる事態を指しているようです。政府がある技術を基準として採用することで、制度的にロックインを強化することもあるし、既得権益をもつ主体によって、政治的に固定化されることもあります。

使い慣れた技術を使い続けることの波及効果をあらためて、考えさせられる言葉ですね。

クリニカルデータ国際シンポジウム

3月5日（金）、鉄門記念講堂にて、「クリニカルデータ国際シンポジウム～未来へ向けたデジタル診療情報の利活用を考える～」を開催しました。前半は日本での利活用の現状を報告するプレセッション、後半は欧米からの研究者も交えて最新のIT研究についての報告があり、クリニカルデータの利活用について、各界の識者の方々の活発な議論が交わされました。詳細は次号にてご報告します。

Crossroad:
交差道路や、道が交差するところにある集会場を意味します。産業界と研究者のクロスする場所の意味をこめます。

東京大学学生・北京大学学生、ビジネスプラン交流勉強会 第5期東京大学アントレプレナー道場 北京大学との学生交流会、歓迎式典開催

入居企業募集中!



写真上: 今回訪問した北京大学来訪団と、東京大学産学連携本部の関係者、第5期東京大学アントレプレナー道場に参加した学生。
写真左下: 北京大学来訪団歓迎式典の様子。写真右下: 握手をかわす松本洋一郎理事と王麗梅先生。

1月28日(木)本郷キャンパス本部棟12階会議室にて、北京大学来訪団歓迎式典が行われました。これは第5期東京大学アントレプレナー道場(学生起業家育成プログラム、産学連携本部主催)の起業教育プログラムの一環で、昨年11月には優秀上位の中から選ばれた3チームの本学学生が北京大学を訪問しました。今回は北京大学ビジネスプランコンテスト(共青团北京大学委員会主催)の優秀上位3チームを本学に招きました。歓迎式典では、北京大学来訪団団長の王麗梅先生(北京大学校務委員会副主席)が挨拶をされ「昨年度から始まった起業教育プログラムのおかげで両大学の学生交流が活発になり、お互いに刺激し合える関係が生まれてきた。今後もこういった活動は積極的に続けていきたい」と述べられました。その後、アントレプレナープラザにて、両大学学生によるビジネスプランのプレゼンテーション・ディスカッションが行われました。各学生の質疑応答は大変活発で、休憩時間に食い込むほど討論が交わされました。1月29日(金)には、北京大学学生のビジネスプランをベンチャーキャピタリストが講評する時間が設けられました。各チームからは日本の専門家のアドバイスに大きな刺激を受けた様子が窺えました。

現在、産学連携プラザインキュベーションルームにて、入居企業を募集中です(詳細は以下のサイトをご覧ください <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/kigyou/incubation>)。WEBサイトでは、募集要項、インキュベーションルーム仕様一覧、申請書類などがダウンロードできるようになっています。起業をお考えの研究者の方は、産学連携本部事業化推進部(seed@ducr.u-tokyo.ac.jp)までご連絡ください。



興味のある方はぜひアクセスしてください。

アンビエント・エレクトロニクスの技術が生活空間を大きく変える! 東京大学産学連携協議会運営本部主催 第18回科学技術交流フォーラム開催される



藤田博之教授(生産技術研究所副所長)の講演を熱心に聴く参加者のみなさん。

1月19日(火)本郷キャンパス山上会館2階大会議室において、第18回科学技術交流フォーラム「『アンビエント・エレクトロニクスがもたらす情報社会の変革』ーヒューマン・セントリックな情報社会を目指してー」が開催されました。身の回りで通常目にする機器に、多様かつ大量の入出力素子の機能を作りこんだデバイスを『アンビエント・デバイス』と呼び、電子ブックや、デジタルサイネージ(電子看板)をはじめ、将来の情報機器、家電、流通、医療等の産業に多く寄与することが期待されています。今回、アンビエント・エレクトロニクスを『デバイスから機器・センサー・ネットワークを通じた実社会への応用』という脈絡の中で位置付けました。ヒューマン・セントリックな情報社会へ向け、有機デバイスから応用技術までを含めた各分野の第一線で活躍する本学の研究者(生産技術研究所、大学院工学系研究科、先端科学技術研究センター、大学院情報理工学系研究科)と、産業界側の専門家(大日本印刷(株)、(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ、日本電気(株))が連携する形で講演しました。参加者からは、「アンビエント・エレクトロニクスの現状の最先端技術が把握できてよかった」「大学で創出した技術シーズを社会に還元できる展望と期待が抱かれ、大変頼もしく思えた」という感想が聞かれました。

連絡先: 産学連携本部(本部産学連携グループ)
電話: 内線22857(外線03-5841-2857)
WEBサイト: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo

コミュニケーションセンターだより No.66

■UTCC出店のお知らせ～其の巻～

「3/24（水）学位記授与式、3/25（木）卒業式」

皆さんこんにちは。毎日寒いですがいかがお過ごしですか？寒いとはいいつつ、街ではちらほら梅の花が咲き始めていますね。春の到来を感じます。

さて、来たる3/24は学位記授与式、3/25は卒業式ですね!!

今年もコミュニケーションセンターでは、【御酒・春限定ボトル】の販売を24日より開始致します。

白地の御酒ボトルに桜の花があしらわれ、さらに「祝2010年」の記念文字が入ります。この時期にしかお求め頂けない華やかな限定ボトル、ご卒業のまたとない記念品になるのではないのでしょうか。

期間・数量限定での販売になりますので是非お早めにお求め下さいませ。

さらに、「卒業式・学位記授与式」式典当日、銀杏並木特設テントにおきまして、御酒有料試飲会を開催致します。お値段200円で御酒の試飲、さらに試飲にお使い頂く御酒のボトルと同じ美濃焼きで焼いたオリジナルおちょこをお持ち帰り頂けます。

御酒がお好きな方はもちろん、まだ御酒を飲まれたことのない方も是非この機会にご試飲下さい!!



(左)「御酒 陶器ボトル」4,200円(税込) オリジナルおちょこ
(右)「御酒 ミニボトル」1,995円(税込) (非売品)

*実際の「御酒・春限定ボトル」には、上記桜模様他に「祝2010年」の記念文字が入ります。

■UTCC出店のお知らせ～其の式～

「4/12（月）入学式」

卒業式が終わると今度はあっという間に入学式。

3月、4月は別れあり、出会いありと忙しいシーズンですね。

今年もコミュニケーションセンターは武道館にてテント出店致します。スタッフ一同、1年で一番楽しみにしているイベントです!

当日は大変混雑が予想されますが、ご入学の皆様を祝福する意味でもスタッフ一同盛り上げていきますので是非テントにも遊びにいらして下さい。

(担当：UTCC 吉岡)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp



ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください!



東大ナビ
はじまる

ケータイでお得なイベント情報をGET!

詳しくは utnav.jp にアクセス。

または mail@utnav.jp に空メール!

東京大学 教育企画室



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信!

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力!

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了!

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- http://utnav.jpにアクセス
- イベント掲載フォームから送信!
- 追ってスタッフよりご連絡致します教育企画室TREEオフィスまで!
- 内線；27823
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟403号室

仕事は楽しく やりがいのあるものに

研究所の管理運営と、研究所の事務職員スタッフの人材育成が主な業務です。

国の政策はどのように進んでいるか、変化しているか。東京大学の方向性と合致しているか。所内執行部が正しい方向性を見いだせるように準備できているか。十分な研究成果が出る環境を整備しているか。事務職員が研究所に対してどのように貢献できているか。事務職員の持つ知識と能力を生かしているか。管理職としてスタッフにしっかりと助言できているか。等々試行錯誤の毎日ですが、大変充実しています。永い歴史の中ではぐくまれた在り方、考え方も尊重しつつ、教職協働に一歩でも近づきたいと奮闘しています。

仕事を楽しくやりがいのあるものにするために、業務に対して不平不満ではなく改善の方向性に持っていくことを信念としています。ほんの小さな成果が出ることで、仕事をしていて良かったという満足度は一気に上がります。

研究所の教職員は女性の割合が多く、特に事務職員はお子さんや子育てをしながら働いている方もいます。そのため、勤務時間内に業務をスマートにこなそうという雰囲気や醸成されつつあることが喜ばしいことです。次世代育成そして自身の経験上、女性が働きやすい職場環境を整えていくことも私の重要な仕事です。嬉しいこと続きで、育休を終える方、これからの方、さらに研究所の仲間からカップルも誕生しています。こちらも成果ありと悦に入っています。

家庭では3世代同居の大家族で、子供たちを喜ばせたいと、平日はできない料理を土日に時間をかけて作ることが楽しみとなっています。仕事と同様にうまくできているかどうか。子供たちの食べる様子で一喜一憂の休日ですが、仕事を頑張る糧になっています。

得意ワザ：物事を先々に進めておく
自分の性格：前向きで折れそうで折れない
次回執筆者のご指名：齋藤香代子さん
次回執筆者との関係：
業務改善Gでともに考え苦労した仲間
次回執筆者の紹介：
意を尽くした簡潔明瞭なPPT作成は彼女にお任せ



(写真・上)
デスクにて

(写真・中)
事務職員スタッフとともに

(写真・下)
子供たちが飾り付けたケーキ





教育学部附属中等教育学校で平成21年度サイエンス・パートナーシップ・プログラム行われる

教育学部附属中等教育学校では、今年度、高校理科の各科目で科学技術振興機構（JST）の支援を受けて高大連携講座を企画・実施した。今までも毎年、総長授業を始めとして、教育学研究科、学内の先生方に授業をしていただくなどの連携授業は行われてきた。しかし今年度は、初めて理学系研究科に講師の推薦をお願いするというかたちで連携体制をつくり、物理・化学・生物・地学の各科目で講座を開講できる運びになった。

物理分野では「熱・統計力学の体験」というテーマで理学系研究科教授 宮下 精二先生に講義をお願いし、とらえにくい世界を目に見える形で体験させていただいた。また宮下研究室の見学もさせていただいた。

化学分野では「ものをつくる化学のこれから～グリ

ーン・ケミストリー～」というテーマで理学系研究科特任教授 林 輝幸先生に講義と中等教育学校化学教室で実験をしていただき、グリーンケミストリーの研究現場として工学系研究科水野研究室に協力をいただき研究室を見学させていただいた。

生物分野では「発生生物学」というテーマで総合文化研究科特任教授 浅島 誠先生に講師をお願いして講義と浅島研究室の施設をお借りして実験をさせていただき、あわせて研究室の見学もおこなった。

地学分野では「マントルの性質を探る」という大きなテーマから岩石について考えるということで、新領域創成科学研究科教授 鳥海 光弘先生に講義と長瀬の巡検、柏キャンパスの鳥海研究室見学と盛りだくさんの講座をお願いした。

すべての講座は実験実習の費用としてJSTの支援を受け、この1月に事前・事後学習も含めて、すべて無事終了した。これからも引き続き理学系研究科をはじめ、他研究科・施設との連携授業を実施していきたい。



「熱・統計力学の体験」宮下 精二教授



「発生生物学」浅島 誠教授



「ものをつくる化学のこれから」林 輝幸教授



「マントルの性質を探る」鳥海 光弘教授

INFORMATION

シンポジウム・講演会

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

駒場博物館「種生物和文誌 イラスト原画展」

駒場キャンパス内において日本生態学会東京大会を開催するにあわせて、種生物学会・和文誌の表紙に用いられた村上美咲氏の絵画作品の展覧会を開催します。

主な展示物は、最新作を含めこれまでの表紙に使った原画作品と、実際に出版された冊子10冊。この他、本展覧会用に作者が特別に作成した作成過程の原画資料を用いて、実際の表紙ができるまでの工程についても展示解説します。

期間：3月15日(月)～4月16日(金)土日祝日休館

開館時間：10:00～18:00(入室は17:30まで)

会場：大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館 2F
自然科学博物館展示室

主催：東京大学教養学部 自然科学博物館

共催：種生物学会、株式会社文一総合出版

問い合わせ先：

大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館

TEL：03-5454-6139

FAX：03-5454-4929

URL：<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/>

お知らせ

保健・健康推進本部

3地区保健センター「新入生健康診断実施に伴う休診のお知らせ」

保健・健康推進本部では例年4月上旬から中旬にかけて駒場キャンパスにおいて新入生健康診断を行っています。3地区(本郷・駒場・柏)の保健センター全体で健康診断業務に対応することとなりますので4月2日(金)、5日(月)、6日(火)を休診とさせていただきます。また、上記3日間のほかにも4月中旬ごろまで新入生健康診断に関係する業務のために、やむを得ず休診や診療時間の短縮など業務時間に変更等が生じる場合がありますので予めご了承ください。

各地区の保健センターへお越しになる際にはご面倒でも下記ホームページをご覧ください。電話等で状況を確認してからお越しになるようお願いいたします。

学生、教職員の皆様には大変ご不便をおかけしますが、何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

【問合せ先】

保健・健康推進本部

URL：<http://www.hc.u-tokyo.ac.jp/>

本郷保健センター：電話 03-5841-2574・2575

内線 22574・22575

駒場保健センター：電話 03-5454-6080 内線 46080

柏保健センター：電話 04-7136-3040 内線 63040

お知らせ

情報基盤センター

“総合図書館オリエンテーション”実施のお知らせ

本郷キャンパスにある「総合図書館」を知っていますか？活用していますか？

4月に下記の日程で“総合図書館オリエンテーション”を、総合図書館と情報基盤センター図書館電子化部門の共催で実施します。

春から初めて総合図書館を利用される方はもちろん、これまで利用したことのある方も、この機会にオリエンテーションに参加して、ぜひ総合図書館を使いこなしてください。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。

※英語コースもあります。留学生のみなさんご参加も、お待ちしております。

●集合場所：

本郷キャンパス総合図書館1階 総合案内カウンター

(予約不要。直接お越しください。)

●内容：各コマ 30 分（1 コマだけでも参加OK）

- ・「OPAC 入門」：東京大学 OPAC の使い方（蔵書検索）、電子ジャーナルの探し方
- ・「利用案内」：総合図書館の利用案内
- ・「書庫案内」：総合図書館書庫の案内、利用法
- ・「国際資料室案内」：国際資料室の案内とインターネットによる検索

●参加費：無料

●日程：

■ 4 / 7（水）

- 13：00 - 13：30 OPAC 入門
- 13：30 - 14：00 利用案内
- 14：00 - 14：30 書庫案内

■ 4 / 9（金）

- 13：00 - 13：30 OPAC 入門
- 13：30 - 14：00 利用案内
- 14：00 - 14：30 書庫案内

■ 4 / 12（月）

- 15：00 - 15：30 OPAC 入門
- 15：30 - 16：00 利用案内
- 16：00 - 16：30 書庫案内

■ 4 / 13（火）

- 11：00 - 11：30 OPAC 入門
- 11：30 - 12：00 利用案内
- 12：00 - 12：30 書庫案内

■ 4 / 14（水）

- 11：00 - 11：30 OPAC 入門【英語コース】
- 11：30 - 12：00 利用案内【英語コース】
- 12：00 - 12：30 書庫案内【英語コース】

■ 4 / 15（木）

- 13：00 - 13：30 OPAC 入門
- 13：30 - 14：00 利用案内
- 14：00 - 14：30 書庫案内

■ 4 / 19（月）

- 13：00 - 13：30 OPAC 入門
- 13：30 - 14：00 利用案内
- 14：00 - 14：30 書庫案内
- 15：30 - 16：00 国際資料室案内

■ 4 / 20（火）

- 13：00 - 13：30 OPAC 入門【英語コース】
- 13：30 - 14：00 利用案内【英語コース】
- 14：00 - 14：30 書庫案内【英語コース】
- 15：30 - 16：00 国際資料室案内

■ 4 / 21（水）

- 15：30 - 16：00 国際資料室案内

■ 4 / 23（金）

- 17：00 - 17：30 OPAC 入門
- 17：30 - 18：00 利用案内

18：00 - 18：30 書庫案内

●問い合わせ：

総合図書館 参考調査係
03-5841-2647（内線：22647）
sanko@lib.u-tokyo.ac.jp
http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/sogoto/

情報基盤センター 学術情報リテラシー係
03-5841-2649（内線：22649）
literacy@lib.u-tokyo.ac.jp
http://www.dlitc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html

2010年4月

総合図書館 オリエンテーション

開始時間までに、
本郷キャンパス 総合図書館 1F 総合案内カウンター集合

<内容> 1コマ30分（1コマだけでも参加できます）
 「OPAC 入門」 東京大学 OPAC の使い方（蔵書検索）・電子ジャーナルの探し方
 「利用案内」 総合図書館の利用案内
 「書庫案内」 書庫の案内・利用法
 「国際資料室案内」 国際資料室の案内とインターネットによる検索

予約不要 無料

月	火	水	木	金
4月		7 OPAC 入門 13:00-13:30 利用案内 13:30-14:00 書庫案内 14:00-14:30		9 OPAC 入門 13:00-13:30 利用案内 13:30-14:00 書庫案内 14:00-14:30
12 OPAC 入門 15:00-15:30 利用案内 15:30-16:00 書庫案内 16:00-16:30	13 OPAC 入門 11:00-11:30 利用案内 11:30-12:00 書庫案内 12:00-12:30	14 英語コース OPAC 入門 11:00-11:30 利用案内 11:30-12:00 書庫案内 12:00-12:30	15 OPAC 入門 13:00-13:30 利用案内 13:30-14:00 書庫案内 14:00-14:30	
19 OPAC 入門 13:00-13:30 利用案内 13:30-14:00 書庫案内 14:00-14:30 国際資料室 案内 15:30-16:00	20 英語コース OPAC 入門 13:00-13:30 利用案内 13:30-14:00 書庫案内 14:00-14:30 国際資料室 案内 15:30-16:00	21 国際資料室 案内 15:30-16:00	総合図書館 休館日	23 OPAC 入門 17:00-17:30 利用案内 17:30-18:00 書庫案内 18:00-18:30

総合図書館 参考調査係 sanko@lib.u-tokyo.ac.jp 03-5841-2647
 情報基盤センター 学術情報リテラシー係 literacy@lib.u-tokyo.ac.jp 03-5841-2649

お知らせ

情報基盤センター

文献探しの講習会 “情報探索ガイダンス” のご案内

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを開催しています。

パソコンを使った実習形式なので、わかりやすいと好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。

新学期がスタートしたこの機会に、ぜひご参加ください。お待ちしております。

●日程・コース概要：

■4/12(月) 12:10～12:30 自宅から検索するには？ (20分のワンポイント講習会)

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCS アカウント認証による SSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

■4/16(金) 16:00～17:00 文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種文献の探し方を、まとめてコンパクトに実習します。

■4/26(月) 12:10～12:40 日本の論文を探すには？ (30分のクイック講習会)

日本国内の雑誌論文の代表的なデータベース「CiNii」(サイニイ)の使い方をコンパクトに解説します。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

●参加費：無料

●予約不要

各回先着12名。直接ご来場ください。

●新学期の授業に！ご希望の内容で出張講習します。

ご希望の内容、日時、会場などに応じたオーダーメイドの講習会を承っています。(無料)

授業の1コマや、ゼミなどにご活用ください。

ご希望の内容、日時、会場、人数、連絡先を、メールで下記問合せ先までご連絡ください。

詳細は下記サイトをご参照ください。

(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

●データベースや講習会の情報をお届けします。

Litetopi メールマガジン発信中。

当係発行の Litetopi (リテトピ) メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>



お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第17回理学部公開講演会 「理学がとらえる太陽と資源、エネルギー」

近年エネルギーや環境の問題が人類共通の課題として注目されています。私たちの生存は、太陽の活動や地球の環境・資源、植物をはじめ生物による物質生産・消費といった、さまざまな要因の絶妙なバランスによって支えられており、それらを科学的に理解することが重要です。本講演会では、そうした研究の最先端を第一線の研究者がわかりやすく解説します。

日時：4月25日(日) 14:00～16:40 (13:00開場)

* 終了後、講演者との歓談の時間を設けます。

会場：本郷キャンパス 安田講堂

入場：無料 事前申し込み不要

どなたでもご参加いただけます。

定員：700名(当日先着順)

講演内容：

「われらが太陽」

柴橋 博資(理学系研究科 天文学専攻 教授)

「葉はなぜ黒くないのだろうか — 光合成工場としての葉を解剖する」

寺島 一郎(理学系研究科 生物科学専攻 教授)

「メタンハイドレートに非在来型エネルギー資源の可能性を探る」

松本 良 (理学系研究科 地球惑星科学専攻 教授)

中継：インターネット配信を予定

主催・問い合わせ先：大学院理学系研究科・理学部

TEL: 03-5841-7585

E-mail: kouhou@adm.s.u-tokyo.ac.jp

URL : <http://www.s.u-tokyo.ac.jp/PL17>

お知らせ

附属図書館

平成 22 年度夏学期総合図書館備付け図書の推薦について

総合図書館では、学生の学習・研究を助け、また教養をより豊かにするために、全学の教員（常勤講師以上）から図書を推薦していただく制度を設けております。

つきましては、平成 22 年度夏学期に向けて下記のとおり図書の推薦をお願いいたします。

1 推薦の範囲

- (1) 講義に密着した図書は、本郷キャンパスの講義を対象とします。
- (2) その他、学生の教養書としてふさわしいものをご推薦ください。
ただし、雑誌および学生にとってあまりに高度な専門図書は除いてください。

2 推薦締切り

講義に密着した図書は、4月30日（金）
その他の図書の推薦は常時受け付けます。

3 推薦方法

総合図書館備付け図書推薦要領によります。
※推薦要領は、各部局図書館(室)に備付けております。

4 問合せ先

附属図書館情報管理課選書受入係
内線：22626
e-mail：sen@lib.u-tokyo.ac.jp

* 附属図書館 Web サイト

(<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>)

上記サイトの「ニュース」にある「総合図書館備付け図書の推薦について (04/01)」もご参照ください。



あなたの撮った 写真を学内広報に 載せませんか？

学内広報では、教職員の皆さんが撮影した写真を募集します。あなたも自らの写真の腕を学内で披露してみませんか？

■応募条件

1. 東大のキャンパス内で撮影した写真であること
本郷に限らず、東大の敷地内ならどのキャンパスでも可。また、キャンパス内で撮った写真であれば、風景写真でなくても可。人、動物、モノが写った写真でもかまいません。

2. デジタルデータで送付すること

撮影はデジタルカメラ、あるいはカメラ付き携帯電話で行い、デジタルデータ(jpeg、tifのいずれか)をメール添付で送ってください。

3. 1回の応募につき3枚まで受付

多量の写真データ送付はご遠慮ください。
(添付ファイルの合計容量は5MBまで)

■掲載基準&掲載方法

学内広報編集スタッフが独断と偏見に満ちたセレクション(笑)を行い、スペースの空いたページに掲載します。掲載の際には、「作品名」と「撮影者」のクレジットを記載します(匿名希望も可)。また、良い写真が多数集まった場合は、応募写真を紹介する特集、応募写真を紹介する連載なども予定しています。

■締切

特にありません。良い写真が撮れたら送ってください。

■送付先

本部広報グループ広報企画チーム
「学内広報写真募集係」まで。
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



東京にポタン雪

駒場もうっすら雪化粧。入試日でなかったのは幸いです。地面に積もるほどではなかったのですが、咲き始めた梅の花は重そうでした。(2010.2.18)

(撮影：大学院総合文化研究科・教養学部等事務部総務課 広報・情報企画係 鈴木基美さん)



投げ飛ばしたり、投げ飛ばされたり

武道・護身術の心得のある駒場の教職員有志が集まり、講習会が開催されました。ご指導下さったのは、教養学部武道・護身術交流会の木村秀雄教授（合気道四段）。

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

	氏名	異動内容	旧（現）職等
(退職)			
22.2.15	石井 聡	秋田大学大学院医学系研究科教授	大学院医学系研究科准教授
(採用)			
22.3.1	諸井 健夫	大学院理学系研究科教授	東北大学大学院理学研究科准教授
22.3.1	小林 彰子	大学院農学生命科学研究科准教授	
22.3.1	芳村 圭	生産技術研究所准教授	
(昇任)			
22.2.16	鈴木 雄二	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
22.2.16	長谷川 修司	大学院理学系研究科教授	大学院理学系研究科准教授
22.2.16	本原 顕太郎	大学院理学系研究科附属天文学教育研究センター准教授	大学院理学系研究科附属天文学教育研究センター助教
22.2.16	稗方 和夫	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院工学系研究科助教
22.3.1	石川 俊平	大学院医学系研究科准教授	大学院医学系研究科助教
(配置換)			
22.3.1	鈴木 克幸	人工物工学研究センター教授	大学院工学系研究科教授
22.3.1	吉田 眞	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科附属工学教育推進機構教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。



「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提出要領

作成例

本部広報グループ

「キャンパスツアー」スタート!

本学学生がツアーガイドとなって、赤門や大講堂(安田講堂)、三四郎池、総合図書館など、本郷キャンパス内の名所旧跡を案内する「キャンパスツアー」が今年も始まった。キャンパスツアーは昨年度から実施されており、「ジュニアTA制度」に基づき応募した学生が、東京大学の歴史や学生生活のエピソードを交えながら、約2時間にわたり案内する。

今年度のスタートとなった5月14日(土)には、午前、午後合わせて43人が参加し、ツアーガイドの説明に熱心に耳を傾けていた。



広報センター前で説明するガイドとそれを聞く参加者

ツアーには、高校生以上であれば誰でも無料で参加することができる。今後のツアーは、五月祭期間や年末年始、入試期間を除く授業期間の土曜日と日曜日(10:00~12:00、14:00~16:00)に行われる予定である。



正門から大講堂に続く銀杏並木

記事の冒頭に**部局名**を記載

簡潔で分かりやすい**タイトル**を記載

・過去の報告記事(ニュース)では「**である調**」を用いる
・今後のお知らせ(インフォメーション)では「**ですます調**」を用いる

日付には括弧書きで**曜日**をつける

・写真を掲載する場合は、25文字以内で**キャプション**(写真の説明文)をつける。写真は3枚程度まで
・原稿とは別に、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを別途送付する(プリントの写真は学内便で送付)

句読点は「、」「。」を用いる

時間は**24時間表記**とする

・記事は一行25文字の書式で作成する。
・文字数は800字を目安とするが、内容によって増減は可とする。
・人物名は**フルネーム**で表記すること。

提出上の注意

1.提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとして送付すること。

(学内広報担当者の個人アドレスではなく、必ず下記のアドレスに送付してください。)

2.締切日

HPで発行スケジュールを確認すること。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

トップページ>広報・情報公開>学内広報

問い合わせ先・提出先

本部広報グループ広報企画チーム

TEL: 03-3811-3393(内線 22031)

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

※原稿を受け取った後、学内広報担当者から、必ず**受領メール**をお送りしています(概ね1週間以内)。返信メールが届かない場合は、何らかのトラブルで原稿を受け取れていない可能性がありますので、その際はお問合せ願います。

平成22年度 学内広報発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日 (校了)	配布
1398	4月 1日(木)	4月 23日(金)	4月 30日(金)
1399	4月 30日(金)	5月 25日(火)	5月 31日(月)
1400	5月 28日(金)	6月 22日(火)	6月 28日(月)
1401	6月 29日(火)	7月 26日(月)	7月 30日(金)
1402	7月 28日(水)	8月 25日(水)	8月 31日(火)
1403	8月 30日(月)	9月 24日(金)	9月 30日(木)
1404	9月 30日(木)	10月 25日(月)	10月 29日(金)
1405	10月 29日(金)	11月 24日(水)	11月 30日(火)
1406	学生生活実態調査号		
1407	11月 26日(金)	12月 17日(金)	12月 24日(金)
1408	1月 6日(木)	1月 25日(火)	1月 31日(月)
1409	1月 31日(月)	2月 22日(火)	2月 28日(月)
1410	2月 28日(月)	3月 24日(木)	3月 30日(水)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム

TEL:03-3811-3393 内線22031 E-mail:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



Contents

特集

- 02 学生企画コンテスト 本郷キャンパス食環境改善プロジェクトの軌跡
06 新役員の紹介

NEWS

一般ニュース

- 07 本部評価・分析グループ
平成22年度 学科・専攻の設置等について
08 地球観測データ統融合連携研究機構(EDITORIA)
チュニスー東京 ジョイントワークショップ開催される
08 地球観測データ統融合連携研究機構(EDITORIA)
平成21年度「データ統合・解析システム(DIAS)」最終報告会開催
10 海洋アライアンス
第8回イブニングセミナー開催
10 産学連携本部
第1回 八大学産学官連携関係本部長会議開催される
11 総括プロジェクト機構
航空イノベーション総括寄付講座(CAIR) ベルギー大学説明会を開催
12 総括プロジェクト機構、公共政策大学院
航空イノベーション総括寄付講座(CAIR)「航空と地球温暖化に関するセミナー」及び国際交通政策研究ユニット(ITPU)「第5回ITPU国際セミナー 国際航空運送と気候変動」開催報告
14 本部入試グループ
平成22年度外国学校卒業学生特別選考の第1次選考合格者が決まる
15 本部入試グループ
第2次学力試験(前期日程・後期日程)の出願受付終わる
16 本部入試グループ
平成22年度第2次学力試験(前期日程)第1段階選抜合格者が決まる

部局ニュース

- 17 退職教員の紹介
35 気候システム研究センター
2009一般公開講座が開催される
36 大学院工学系研究科・工学部
第5回ホロニック・エネルギーシンポジウム開催報告
36 大学院総合文化研究科・教養学部
駒場Iキャンパスで「研究科長と留学生との懇談会」開催される
37 大学院工学系研究科・工学部
第2回、第3回先進的工学教育講演会、SEL成果発表会が連続開催される
38 大学院教育学研究科・教育学部
第一回バリアフリー教育開発研究会議開催
39 大学院教育学研究科・教育学部
留学生懇談会を開催
39 生産技術研究所
「第7回東京大学学生発明コンテスト」表彰式行われる！
40 生産技術研究所
モビリティ・フィールドサイエンス(タカラトミー)寄附研究部門設立お披露目および、準静電界の技術シンポジウム開催
41 史料編纂所
「研究と情報の資源化」シンポジウムを開催

◆ 表紙写真 ◆

脱いか東井
(2ページに関連記事)

- 42 大学院工学系研究科・工学部
イノベーション政策研究会第1回ワークショップ「イノベーション政策学を考える」を開催
42 素粒子物理国際研究センター
公開講演会「LHC実験はじまる」開催される
43 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎生、三鷹市民駅伝大会を快走
44 分子細胞生物学研究所
分子細胞生物学研究所で留学生と教職員との懇談会を開催
45 留学生センター
留学生センター「集中日本語コース・学術日本語コース」及び「日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム」2009年度冬学期修了証書授与式が行われる

コラム

- 46 PCリユースのわ 第5回
46 インタープリタース・バイブルvol.32
47 Policy + alt vol.07
48 Crossroad 産学連携本部だより vol.52
49 コミュニケーションセンターだより No.66
49 ケータイからみた東大～東大ナビ通信～
50 Relay Column「ワタシのオシゴト」第49回
51 噴水 教育学部附属中等教育学校で平成21年度サイエンス・パートナーシップ・プログラム行われる

INFORMATION

お知らせ

- 52 大学院総合文化研究科・教養学部
駒場博物館「種生物和文誌 イラスト原画展」
52 保健・健康推進本部
3地区保健センター「新入生健康診断実施に伴う休診のお知らせ」
52 情報基盤センター
“総合図書館オリエンテーション”実施のお知らせ
54 情報基盤センター
文献探しの講習会“情報探索ガイダンス”のご案内
54 大学院理学系研究科・理学部
第17回理学部公開講演会「理学がとらえる太陽と資源、エネルギー」
55 附属図書館
平成22年度夏学期総合図書館備付け図書の推薦について

事務連絡

- 56 人事異動(教員)

淡青評論

- 60 競争原理を超えたインセンティブ

編集後記

3月某日。安田講堂付近にて「表紙写真：脱いか東井」の撮影をしてきました。撮影用の脱いか東井をとり囲み、思い思いの角度で写真を撮ること15分…撮影もおわり、そこにはぼつんと残された寂しそうなどんぶりが…集まる学内広報スタッフの視線(心の声)「…これを、どうするか」一瞬の沈黙ののち、皆の気持ちが一つになりました。はい、捨てるのはもったいないから学内広報スタッフで食わせていただいたわけです。少し冷めてはいましたが、しっかりとした味付けの牛肉とふわふわの卵はそんなことは気にさせません。ひとたび口に入れてしまえば、肉からご飯にあまじょっぱい汁が広がり、箸を置くことすらできないのです。甘さ、しょっぱさに飽きたら紅しょうがでお口直しを。卵とさやいんげんのコラボレーションはまるで輝く太陽をイメージしているかのようです。やはり百聞は一見に如かず。こうして幸せな表紙写真の撮影会は無事終了したのでした。(ち)



七徳堂鬼瓦

競争原理を超えたインセンティブ

競争原理は切磋琢磨によって人間の能力を高め、社会を活性化する重要な役割を果たしている。しかし、競争原理の限界性を知ってそれを超克するインセンティブを確立する必要性を痛感している。学生には、競争原理を主たる動機として行動する人間はせいぜい二流の人間にしかたれない、と伝えている。また、競争原理を超えたインセンティブは、人間精神の3つの欲望である知性・意欲・情感性（知・意・情）をバランスよく健全に

保つことから生まれると、伝えている。

一番目の知性。これを健全に保つためには素朴な好奇心・探求心を大切にすること。

二番目の意欲。何事に取り組むときも使命感・責任感を持って取り組むことが大切である。自分の利益を真っ先に求める人間ではなく、大義の心をもって自己犠牲も覚悟で物事に取り組むことが出来る人間になれと学生に伝えている。

三番目の情感性。人や物事に対する愛情や感動する心が大切である。何かを見て知って素朴に感動する情感性が好奇心を刺激し、ひいては知性を活性化する。さらに、情感性は使命感を強固にする。社会に貢献しようとする使命感は、隣人や社会、さらには、人類や世界に対する愛情があつてこそ持続可能な使命感となり得る。

グローバル化に伴い、現代はますます競争の激しい環境になっている。このような競争社会で持続可能な強いインセンティブを持って健全に生き残ることのできる人間は、素朴な好奇心を大切に、自分だけの利益に捕らわれない使命感（Mission）、人と物に対する愛情（Passion）をもって何事にも取り組むことのできる人間だと確信している。

Competition（競争）を補うもう一つのC、Compassion（思いやり）を失わないことが競争社会で健全に生きる上で重要であり、最終的な勝利者になる秘訣であると考え。競争原理を超えたインセンティブを持って行動できる人間を育てる「真なる」エリート教育の必要性を痛感する。これが私の抱く「タフな東大生」像でもある。

雨宮慶幸（大学院新領域創成科学研究科）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1397 2010年3月19日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL：03-3811-3393

e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

<http://www.u-tokyo.ac.jp>